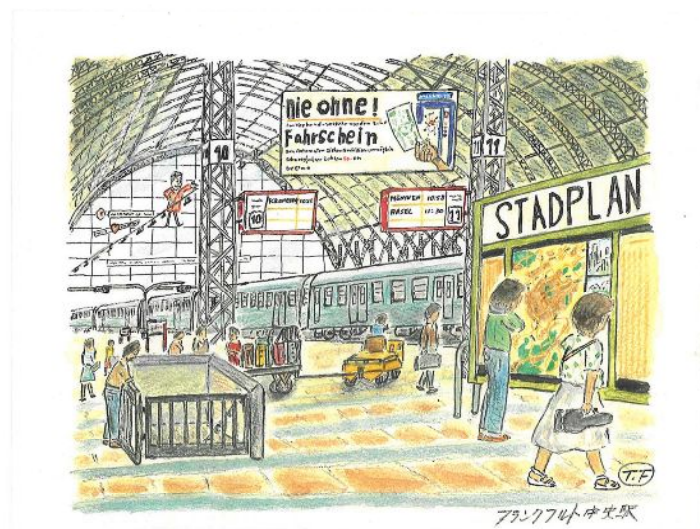


# 西欧・東欧見聞録

(ベルリンの壁崩壊前のヨーロッパ紀行)



## 西欧・東欧見聞録（ベルリンの壁崩壊前のヨーロッパ紀行）

### プロローグ（旅のはじまり、西ドイツ、オーストリア）

1989年は、今にして思えば20世紀史上重要な年、いわば激動の年であった。

このような時に冷戦終結を前にしたヨーロッパを旅することができたことは非常に有意義なことであった。1989年4月、中国では胡耀邦総書記が失意のうちに死亡。彼の死を悼む学生や一般市民は北京の天安門広場に集結、彼の名誉回復を要求。彼らが実際求めたのは、中国の民主化であった。5月には約1000名の学生が天安門でハンストに入った。6月4日未明、軍がデモ隊に無差別発砲を開始、天安門広場は血に染まった。いわゆる天安門事件である。

この騒動のようやく治まりかけた7月3日、成田をあとにした。ソ連国営エアロフロートSU578便。モスクワ経由フランクフルト行きである。ブダペストまで同行する本間とともに、初めての海外旅行ということではいささか興奮気味であった。成田は雨。客は日本人旅行者とロシア人、ロシア人は一般人が旅行するなど無理なご時世であったから、整った身なりからしても駐日大使館員かまたKGBの人間なのだろうと憶測を働かした。スチュワーデスはいかにもスラブという感じの小太りのおばさんで、最初からサービスの良さなど期待してなかったから良かったが、共産圏にありがちなノルマだけこなせば良いという姿勢がありありであった。

定刻に成田を出発。機内には、宇宙人の文字のようなキリル文字の表示。通常の海外旅行とは異なり、華やかさというよりいささか緊張の出発であった。機内は、はっきり言って狭い、片側3列で中央通路一本のみ。日本を出てしばらくは雲海の上を飛行、どこを飛んでいるのか全く見当がつかなかった。暇だったので、6カ国会話のガイドで予習をした。特に、フランクフルトに着いてからは可能なかぎり現地語を話そうと決めていたから、ドイツ語の空港編を開いて税関の通り方からはじまってホテルのチェックインまで。4時間ぐらい経っただろうか、眼下に緑の大地と川の流れが見えた。シベリア上空か。2回目の機内食が配られる。機内食は、いくらソ連でも国際線のためか、まともだ。黒パンのようなものが出たが、これがライ麦パンであろうか。酸っぱいような味がしてあまりおいしくはなかった。ソ連にもファンタという飲み物があり、キリル文字でそれらしく日本と同じようなパッケージで書いてあったのには驚いた。機内食に、キャビアもつくと事前に聞いていた。フランクフルトまでトランジットを含めて14時間。この間に5回も機内食が出た。やがて飛行機は再び雲海の中に、機体がかなり揺れ始める。そうこうしているうちにロシア語のアナウンスがあり、時間的にいってモスクワ到着と思われた。

長いロシア語のあとたった一言日本語で”まもなくモスクワ、シュレメチボ第2空港に到着します。”とあった。冷たい雨の中、着陸した。エアロフロートの国際線のパイロットはソ連空軍上がりと聞いていたが、さすがにショックも少なく上手な着陸であった。

空港ビルに入って驚いた。私は今まで、日本以外知らなかったもので、日本のことが当たり前のような感覚になっていたが、この暗さは何なんだ。音楽もなにもない空間。照明は必要最低限に

も満たない。これが国家を代表する首都の国際空港かと思うと信じられない。成田空港が停電になり、非常電源だけで照明を行ったらこんな具合なのだろうと思われる。空港のレストランを覗いてみたら、これまた暗い。よく目をこらしてみると、ろうそくの明かりの中には結構人がいるではないか。しかし、みな無口で黙々と食べているようだった。ビル内を一回りすると、異様にその区画だけ明るい部分があり、見ると日本食のレストランであった。実際のところは、レストランといえるようなしろものでないことはすぐに判明した。”いらっしゃいませ”とたどたどしい日本語で迎えてくれたのは、モンゴル系か朝鮮系のロシア人であった。店内には、富士山の絵（銭湯で見るとほぼ同様）、和傘がひろげておいてある。

メニューを見ると、内容の貧弱さといったらない。レストランのメニューに焼きおにぎりである。とりあえず、日本円換算 300 円のコーヒーと 1300 円相当の焼きおにぎりを頼んだ。すぐに、がっかりした。缶コーヒーといかにもレンジでチーンのおにぎりが出てきたのである。まあそれでも本日 5 食目でもあり、とりあえずよしとするかと、あきらめの気持ちで食した後、再び空港を探索した。行き先にはウランバートル、ピョンヤンなどがあり東側の国にいることを実感する。止まっている飛行機には、ハンゲル文字と北朝鮮の国旗が描かれ、ここだからこそみれる光景だと、異国の中にいる自分を改めて感じ入った。空港ロビーでは銃を持った若い兵士が警備にあたっていたので英語で”私たちのフランクフルト行きは何時に乗り込めるのか？”と聞いてみたが、英語で”一時”と、現在の時間を答えてくれた。結局、わからないので、チェックインカウンターの長い列に混じって待っていた。

やがて、フランクフルト行きのチェックインの表示があり飛行機に乗り込むと、ここでまた、機内の情景が一変しているのに驚いた。乗ってきたのは皆、背が高く大木のような人ばかり。これが、ゲルマン民族なのだ。これから、いろいろな国をまわってみると、ゲルマン系の北方の人々は概して体が大きく、ラテン系の南方系の人々は体が小さく日本人はどちらかというラテン系の小さな体であることがわかる。モスクワまでとは違って、非常に窮屈な感じをしながら窓の外を眺める。

いま、どのあたりを飛んでいるのであろうか。ウクライナ？ポーランド？と思いをはせながら、6 食目の Diner にうんざりしていると、再び機体が揺れだした。と、近くのドイツ人が”フランクフルト、フランクフルト”と叫びだした。窓の外を見ると、確かにいかにもドイツといった感じの町並みが見える。機体は徐々に下がりだし、着陸。果たして、私は、初のヨーロッパへの第一歩を記したのであった。

空港ターミナルへはバスで移動。紺色の尾翼に翼のマークのルフトハンザ機が並ぶ。ついに、リングフォンの第 1 章で出てきたフランクフルト国際空港”ライン・マイン・フルーグハーフェン・フランクフルト”にきたのである。ここで、テキスト通りの反応を期待して税関が“ハーベン・ジー・エトバス・ツー・フェルツォレン？申告するものはありますか？”と聞いてくるものと思っていたら。私の赤いパスポートを遠くから見ただけで開きもせず、にこっと笑って通してくれたのには、はっきり言って拍子抜けした。どちらかという儀式のような入国審査があった方が実感があるのにと贅沢なことを思いながら、いとも簡単に西ドイツに入国してしまったの

である。

しかし、さすがに経済大国西ドイツの空港だけあって明るくきれいだ。もっとも、空はまだ明るいけれども、時間はかなり遅く、店は開いていなかった。とにかく、フランクフルト市内に向かおうということになり S バーンの表示に向かって歩く。

S バーンの駅の表示は片方がフランクフルトで片方がマインツとなっており丁度、ドイツ国鉄 DB (Deutsches Bundesbahn) の本線の沿線上に空港があることが想像できる。夕闇迫る中、私たちを乗せた S バーンは約 20 分ほどでフランクフルト中央駅についた。今回の旅行は、気ままな旅の予定なので宿泊地も大まかにしか決めてなかったが、さすがに最初の日のホテルだけは予約しておいた。しかも、フランクフルトは特に駅前是非常に治安が悪いと聞いていたので、最初の日から宿探しで路頭に迷うのだけはさけたかった。本日のホテルは駅のすぐ近くのエクセルシオールで上等なホテルであった。チェックインは英語で行ったが、さすがに緊張した。

部屋に入ると、安心したのか人通りもいっぱいあったし大丈夫だろうと、駅に買い物に行った。駅のキオスクでビールを買った。たぶん、フランクフルトの地酒であるヘンニンガーだったと思う。ビールを飲んで心地よい酔いに任せながら、いよいよフランクフルトに来たのだと、感慨に耽った。外を見ると、さすがにドイツ経済の中心都市だけあって高層ビルも見える。ただ、駅前のビルに韓国企業の看板もあり日本に負けず韓国経済も上昇中であることを実感できる。今日は 14 時間も飛行機に乗り、朝も 4 時に出発したのにあまり疲れていない。やはり、初めての海外旅行で興奮しているのであろう。また、西回りはどんどん自分の体内時計よりも時間が遅れてくる勘定なので時差ボケがないのかもしれない。

翌日は、曇り時々晴れ。ホテルをチェックアウトしてまず最初に行くことは、本日の宿を確保すること。贅沢は最初だけということにし、ユースホステルに泊まることにした。市電に乗り、メイン川の対岸ザクセンハウゼンのユースホステルに行き宿泊の手続きをとった。ユースホステルだとさすがに安い、大部屋の二段ベットだ。これからずっと、街に着いたらまずは宿探しの生活が始まるのだ。大きな荷物を預け、シュタットプラン（地図）をもらって街に出た。これからずっと、ユースホステルや駅のインフォメーションでもらう地図がかなり重宝することになる。

再び駅に戻り、まず金を両替しようとしていたらドイツ人の若者が近寄ってきた。両替屋を案内してくれるらしい。しかし、まだ、ドイツに来たばかりで当初彼を信用しなかった。我々の会話でそれがわかるらしい。いいから黙ってついてこいという感じで、われわれも仕方なしについていくときちんとした両替につれていって来て、疑ってかかって大変に申し訳なかった。中心街ハウプトバッヘへ地下鉄 U-bahn で向かった。まずはとりあえず観光とばかり、ゲーテの家に行ったが、ドイツ文学にさほど造詣の深くない私はすぐに飽きてしまった。しばらくわかれて自由行動とした。私にとっては、ドイツ金融の中心フランクフルトの町並みの散策のほうが良い。とりあえず自宅にはがきを出そうと絵はがきを買い求め、軽くしたためて郵便局を探した。このあたりから、かつて一生懸命リンガフォンでドイツ語を勉強したことが役に立ちだした。“エントシュルディグング。ギプト・エス・アイネ・ポストムト・イン・デア・ネーア？この近

くに郵便局はありますか？”と自然に出てくる。これから、このかた、ドイツに限らず”何々が近くにありますか？”や”なにになにしたい”や”ありがとう”などがきわめて有用であることがわかることになる。再び本間と待ち合わせの場所で会って、デパートのレストランで昼飯を食べた。（結局はお上りさんである。）ここでつかってみたのはチップを渡すときのことばで、“シュティムト・ショー！つりはいらぬからとっておいてくれ”英語でいうところの”Keep the change!”である。この言葉は”ダス・イスト・トリンクゲルト”といって渡すよりかっこいいと書いてある。

（下：フランクフルト中央駅前にて）



食後は、夜は危険で歩かない方がよいといわれるメインストリートのカイザー通りを散策。途中写真屋でフィルムを買ったが、富士カラーの製品の多いこと、特に”写るんです”は大ヒットらしくこれからどの国に行っても（共産圏にはなかったが）目にするようになる。しかし、ひねくれ者の私は、せっかくドイツにいるのだからとアグファカラーのフィルムを買った。買って見て驚いたのは、フィルム代に現像料も含まれていることであった。また、このごろ咳が出だしてひどかったので薬局（アポテーケ）に行って咳止めを買った。“イッヒ・ハーベ・フィーレ・フステン。”（咳がひどい）と言ったら咳止めを買うことができた。フランクフルト中央駅の公衆便所に入ったら、ここでまた不思議な光景を目にする。便所はきれいなのだがどれもこれも便座がない。後日、これは、誰かが家で使うために持って行ってしまったのだと聞いて驚いた。真偽のほどはわからない。

一通りフランクフルトを散策した後、メイン川の畔の公園で一息入れる。メイン川はライン河の支流だが、貨物運搬船が盛んに通り大陸の内陸部では水運もかなりの比重を持っていることが



(上：メイン川とフランクフルト中心街、下：メイン川のほとりで)

実感される。フランクフルトは正式には **Frankfurt Am Mein** (メイン川沿いのフランクフルト) という。メイン川の水運で現在の富を築きあげたのであろう。東ドイツのポーランド国境近くにはオーデル・ナイス線で有名なオーデル川の名を冠した街 **Frankufur An der Oder** (オー

デル川沿いのフランクフルト)という街がある。気がついたことだがドイツの民家の窓辺には皆、きれいな花が飾ってあって美しい。あれは、ゼラニウムで虫除けでもあり実用性と美観にと役に立っている。

ユースホステルの近くを散策、フランクフルト南駅近くの公園では夜 9 時にもなるのにまだ空は明るく、子供連れの家族が遊んでいた。緯度が高いだけあって、夏は日本とは比較にならない位、日没が遅いのだ。いったん、ユースホステルに戻って、ザクセンハウゼンに繰り出した。ジャーマンソーセージをたらふく食べ、ビール、ワインと気持ちの良い夕べであった。思えば、最初の訪問地をドイツにしたのは大正解であった。街はきれい、治安も聞くほど悪くない。ほとんど日本にいるのと同じように過ごすことができる。さて、あすからはロマンチック街道にそって南下することになる。宝石のような街ローテンプルクを見ておきたい。

今日はまずロマンチック街道の始点ヴュルツブルグまで行って街を見た後、さらにローテンプルクに足を延ばして宿を取ることにした。予定のインターシテイの発車まで時間があるので、フランクフルト内の市電を乗り歩いた。フランクフルトの市電は白とオレンジのツートンカラーだ。停留所にはフランケンシュタイン広場(フランケンシュターナープラッツ)などおもしろいものもある。

フランクフルト中央駅でヴュルツブルグまで切符を買ったが、果たしてドイツ語で用が足りた。語学というのは、少しずつ言葉を使ってみて、実際使えることがわかると、そのあと自信をもって使うことができる。これの積み重ねなのだとしみじみ感じた。インターシテイで 1 時間半。ユーレイルパスの一等パスを持っていたが、今使うのはもったいないので 2 等にした。同行の本間には申し訳ないが、2 等も飾らぬ雰囲気があって、我々のようなバックパッカーにはピタシだと思う。

ヨーロッパの鉄道は改札がないので、車掌が検札にくる。無賃乗車も可能なのではないかと思うが無理だそうである。

ヴュルツブルグにつくとまず黄色い市電に乗りマルクト広場に向かった。露天のレストランで昼飯にした。3 人連れの地元のおばさんたちと相席になり、しばし、話が弾んだ。しかし、昼間からビールを飲んでの食事とは気持ちの良いものである。食事の後は自由行動とし駅で落ち合うこととした。ここは、8 世紀以来の古都ということでレジデント宮殿など見所も多いが、私はどちらかというと町並みの散策の方に興味が有るので通りを歩くこと(シュタットブンメル)にした。ドイツの街は大体カイザー通りがあって(大体これがメインストリートで)、中心街にマルクト広場が有ることがわかった。(スペインではマヨール広場である。)ひととおりの散策して帰りは黄色い市電には乗らずに駅まで歩いた。

駅の本屋を覗くと、いいものを見つけた。ポケット版の独英・英独辞典である、大きさが 7 cm x 4 cm で日本円にして 800 円程度。このシリーズには今回の旅行中、大いに助けられた。この辞書を購入することにより言葉が飛躍的に増えたのである。スペインでは同じシリーズの西英・英西辞典(同じく黄色に青のラベルでメーカー名はランゲンシャイド)、フランスではメー

カーは別だが仏英・英仏辞典を購入し非常に重宝した。

(下：地元のおばさんたちと)



ヴュルツブルグからローテンブルグまではローカル列車に乗って約1時間程度。

列車の窓の外はいかにもドイツの町並み、整備された町並み。家々はどれも手入れが行き届いてきれい。窓には花。町々の間には緩やかな起伏の畑。想像していた通りのドイツの光景であった。

いつしか雨が降り出し、ローテンブルグにつく頃には大雨となった。駅の有るところは中心街から離れているらしく寂しい。駅で、今晚の宿を確保し、その後はどうしたものかと思案に暮れた。傘もない、駅前にタクシーもない。ええい電話でタクシーを呼んでみるか。駅員にタクシー会社の電話番号(テレフォヌマー)を聞いて公衆電話のダイヤルを緊張しながら回す。”いま駅にいる。2人の日本人だ。ペンション・・・までお願いしたい。”とドイツ語で伝え、待つこと5分。果たしてベンツのタクシーがやってきた。この一件でドイツ語会話にまた自信がついたことはいうまでもない。

ドイツのタクシーに乗って気がついたことだが、ドイツでは大体タクシーといえばベンツである。ドイツの国産車なのだから当たり前かもしれないが、日本では高級車として通っているだけになぜか不思議な気がした。また、客は助手席から乗せることもわかった。

宿に着き部屋に落ち着いた頃には雨もやんだ。本間がブッペンテアターという人形劇を見たいとのことだったのでそれに行った。坂道を上り小さな劇場に。結構人が入っている。劇はやはりドイツ語なのだがさすがに聞き取れない。時々ジョークを入れるらしく周りが大笑いするのだが我々2人は取り残されたように黙っていることしばしであった。

劇のあと近くの小さなレストランで夕食をとりその日は早めに休んだ。

翌日は気持ちの良い天気だった。さわやかな朝で睡眠も十分にとり、さらに晴れのすばらしい



朝、朝食もおいしい。パンはコンチネンタルブレクファストであり、ブロートヒエン（イギリスだと食パンになるようだ）。本間は先に起きて、市庁舎のあたりを散歩して来たらしい。食事のあとゆっくり出発。まず、中世犯罪博物館を見た。魔女の椅子、恥辱の面など中世に犯罪者や魔女狩りの犠牲者がやられたであろうおぞましい展示品を見学した。ここでは、ローテンブルグ市への立ち寄り証明書（日本語で”日出ずる国より来る・・・”と書いてある）をくれた。

きれいな町並みの通りを散策、しっかりとマクドナルドは存在し、昼飯はここで食べた。自宅に絵はがきをしたためる。旅行中、まめにはがきを出すのは、親に心配をかけなくて済むという利点の他に、帰った後にそれを見ると非常に懐かしい思いがすることが帰国後わかった。

有名な Ratstrinkstube（30年戦争の際に、市民を守るために敵の差し出した大量の酒を飲み干して街を救ったマイスタートルンクと愛称される市長の仕掛け時計で有名だがそれは見なかった。）を見た。本日は天気も良いので駅まで歩く。本日は、ミュンヘンまで行く予定だがせっかくだからロマンチック街道の一部くらいは、ローカルバスで動いてみたい。駅前でバスを待つ少女に”ミュンヘンに行きたいんだけど”と聞いてみたところ、ドンビュールまでバスで行って列車に乗って行けばよいと教えてくれた。近くのフォイヒトバンゲンという街に済んでいるとのこと。住所を教えてくれたので、帰国後手紙を出したらびっくりしてくれてその後、3年間文通があった。彼女はお菓子作りのマイスターを目指すとのことで、ニュルンベルグに引っ越し、私も研修医となり忙しくなった時に、途絶えてしまったが、クリスマスには自作のレープクーヘンを送ってきてくれたりと、もっと根気よく文通を続ければよかったと今にして思う。



（ドンビュールの駅で Katja と記念写真）

ドイツのバスは路線バスもベンツで非常にきれいである。裕福な国なのだという思いが

ますます強まる。バスの中はローテンブルグの学校から自宅に帰ると思われる小学生くらいの子供でいっぱい。うるさい。牧歌的な、緑の平原の風景の中をバスはゆっくり走る。途中アウトバーンを横切った。しばらく走ってドンビュールの駅に着いた。ここで先ほどの、少女カトーヤも降りた。写真を撮らせてもらってアウフビーダーセーエン。駅でミュンヘンまでの片道切符を買う。もう、なれたものだ。ローカル線で、アンスバッハまで行き、乗り換えである。ハノーバー発ミュンヘン行きの急行列車がやってきた。ヨーロッパの鉄道は、駅でも放送のあるところは少なく、ましてや発車ベルなどまず無い。ひっそりとやってきてひっそりと発車する。何となく不気味なのは、やかましい日本の駅の光景になれてしまったからか。

婆さんが一人で乗っているコンパートメントに入る。婆さんは、エッセンの近くのブッパータルという街から来たらしい。盛んに、モノレールの説明をしているようだが良くわからなかった。何となく、街の中は、路面電車ではなくモノレールが走っているようだが。しかし、これも、後日といっても約 8 年後だが、子供を連れて上野動物園に行つてモノレールに乗った時に婆さんのいっていたことがわかった。そこには、モノレールの発祥の地、ドイツのブッパータル市のモノレールを模して作られたものを書いてあった。ドイツでは、列車一つ一つ（もっとも急行以上だが）には、それぞれの列車の時刻表が座席においてあり途中停車駅の情報も書いてあり、自由に持ち帰れるようになっている。西ドイツの列車は一等がベージュに赤、2 等がベージュに青でそれぞれ車体の横に D B (Deutsches Bundesbahn: ドイツ連邦鉄道) の略字が書いてある。東ドイツの列車は総じて緑とベージュでこちらは D R (Deutsches Reichsbahn: ドイツ帝国鉄道) と書いてあったが、なぜ共産主義国家なのに帝国なのかわからなかった。

婆さんとひとしきり会話を楽しむ。窓の外は、広大な麦畑。一瞬、ビキニ姿で、畑作業をしている若い女の人の姿が見えて、一瞬我が目を疑った。南ドイツの明るい日差しの中、そんなことがあってもおかしくは無いなど自分を納得させながら窓の外を眺める。

我々は、すぐにミュンヘンにいつてしまうのはもったいないのでアウグスブルグに立ち寄ることにした。古代ローマ帝国のアウグスツス帝にその名が由来し、この町の歴史もその時代；紀元前 15 年までさかのぼることのできる、ドイツでの最古の街らしい。駅に荷物を預けて、市内散策。ルートビッヒ広場、アウグスツスの噴水、フッゲライ（1 年間の家賃が 1.75 ドイツマルク約 140 円の団地）などを見た。ここでは、美人の日本人がインフォメーションにいと聞いていたが、その人はいなかった。

アウグスブルグからさらに鉄道でミュンヘンへ。バイエルン州の州都、ドイツ有数の大都市である。中央駅もさすがに大きい。まずインフォメーションに行つて、ミュンヘンの街の地図をもらいユースホステルの場所を聞いた。ヨーロッパでは i のマークのインフォメーションが充実していて、ことに自由旅行の際には非常にありがたい。また、各都市への時刻表（まさに小さな 1 枚の紙で、時刻表である。）が、主要都市ごとにおいてあり次の訪問予定地ウイーンのものももらっておく。地下鉄でユースホステルに向かい、2 日分の手続きをする。

荷を降ろすと早速、街に出て夕飯にした。ミュンヘンはオリンピックの開催地でもあり、ドイ

ツ有数の大都市である。良く、バイエルン州はその経済的や政治的実力からアメリカにおけるカリフォルニア州にたとえられ、ミュンヘン市自体は日本においては東京に対する大阪のようなものとされる。また、ヒトラーの演説でも有名な都市である。飲み屋があったのでふらっと立ち寄ると、ひげの大男が3人で酒を飲んでいて。一瞬、しまったなと思ったが、3人のほうから招き入れてくれた。バイエルン州の男とオーストリアから来ている男であり、結構いろいろ楽しく話をした。ビールはやはり地酒のレーベンブロイである。ゲルマン系の人のおおきを痛感した。さらに、立派なひげを生やしているので物語に出てくる木こりのイメージである。ほろ酔い加減で店をでてユースホテルに向かう。ミュンヘンはオクトーバーフェストという一般的にはビール祭りが世界的に有名で、10月のその時期になると世界中から観光客が集まるとのこと。さきに出てきたカトーヤも、家族でビール祭りに行ったとの手紙をくれたことがあり、にぎやかさを伝えてきてくれたことがある。



(左：列車のチケット、右：Katja からの手紙)

翌日は朝飯を食べていると、別の日本人の若者が相席を求めてきた。彼も、個人旅行でいろいろと楽しい話を聞かせてくれた。オランダはあまり対日感情が良くないこと、イタリアの食事は非常に美味しい、ことにパスタが美味しいことを力説していた。また、英語ができないとタクシーなどでは、なめられてぼられることもあることなどを話してくれた。

今日は1日自由行動とした。私は、とにかく市内の散策をすることにした。まずは、ニュンヘンブルグ城が近くにあることがわかったのでそこまで歩いて広い場内の庭園を散策した。歩き

ながら、長年の夢であったヨーロッパの地を自分の足で歩いていることの感慨にふけた。それから、青い市電に乗ってあちこち歩いてみた。本日は他にも用事があり、まず、ベルリンまでのチケットを手に入れること、それと今までとった写真がきちんと現像されているのを確かめること。まず、これらの用事を片づけようか。中央駅に戻り、立ち食いのハンバーガーを食べる。やたら立ち食いのスタンドがあるが、ヨーロッパ殊にドイツでは立ち食いが一般的なようだ。広大で近代的なミュンヘン中央駅をひとしきり見た後、格安チケットを売っているというトランスアルピーノのオフィスを探す。ガイドブックではシュバントハーラー通りというところのようだ、自転車に乗っている若い娘に場所を聞いた。(下：ミュンヘン市内の市電)



今の時期のヨーロッパはバックパッカーや、ツーリングの若者が多いせいか、スパッツをはいた活動的な女の子が目につく。トランストランスアルピーノで、ウィーン、ブダペスト、プラハ経由での西ベルリンまでの二等片道切符を買おうとしたが、当方の英語が不十分でなかなか理解させることができなかつたようで、仕方なくオーストリアのウィーンまでの切符を買った。近くに写真屋があったのでいままでとったフィルムを現像してもらおう。カトーヤと一緒にとった写真がきちんとできているかが心配だったのだ。出来上がりはロールのままにするかそれとも数コマずつ切るか(シュナイデン?)と聞かれ、Ja (ヤー：はい) と答える。出来上がりは一時間後(1Stunden)といわれ、その辺を散策した後とりにいった。心配することなく、きちんととれていた。日本では、6コマで1本だが、ドイツでは4コマで1本だった。これはのちに気づいたが、マドリッドでもパリでもそうだったのでヨーロッパ標準なのだ。

とりあえず用が足りたので、市電であちこち移動した。有名なカールスプラッツなどをめぐりドイツ博物館に行ったら、もうすでに閉館の時間であった。西ヨーロッパは緯度が高いので、夏

は日没がかなり遅い。10時でもまだ明るいくらいだ。

仕方なく駅に向かう市電に乗っていると、客は私と、後方にパンクぼい格好をした女が3人乗っていた。こいつらが、どうやら私の噂をしているらしく、生意気そうな口調のドイツ語が聞こえてくる。仕舞いには“ヤパナー・ハーベン・フィーレ・ゲルト。”日本人は一杯金を持っているぞ”という声まで聞こえてきた。これはちょっとやばいなと感じ、駅の近くの停留所で降りて人混みの中に紛れた。中央駅まで行って、そこからユースホテルまでまた市電か地下鉄なのだが、なんか今の一件でこれらに乗る気も無くなり、タクシーでどのくらいかかるか停車中のタクシーに聞いてみた。日本円で約1500円位なので、これを利用することにした。車はやはりベンツで、やはり助手席にのせてくれた。ユースホテルに着くとなぜかほっとした。今日はゆっくり休んで、明日は国境を越えてオーストリアである。

今日はいよいよ国境をこえてオーストリアである。オーストリアはドイツ語で、エオストライヒ（東方の国という意味）であり、似たような名前のオーストラリアが全く別物であることがわかる。巨大なミュンヘン中央駅、ブダペスト行きのオリエントエクスプレスという名の列車に乗る。以前アガサクリスティの小説でも有名だったオリエント急行とは異なり（これは現在VSOE: Venice-Shimpron-Orient Expressとしてロンドン、ベニス間で運行されているはずである。）ただの、国際急行列車であった。車両も東欧圏のものと思われる物が多かった。（下：ミュンヘン中央駅にて）





(オーストリア国境付近の車窓)

ミュンヘン市街を抜けると徐々に高地に向かって進み出した。牧草地が増え、のどかな、牛が草をはむ様な風景が多くなった。何の前触れもなくオーストリアの国境を越えた。入国管理官が切符とパスポートをみるだけで入国手続き終わり。西ヨーロッパはほとんど一体なのだと言うことを感じる。しかし、この open さは東欧圏に入ったとたんに一転するのだが。

相席の人はフランス人だった。フランス語で会話を試みたがあまり通じなくて、話が続かないのでやめた。若干気詰まりな雰囲気です。車窓を眺める。ザルツブルグ着。モーツアルトの生誕地として、そして音楽祭で有名な町だが今回は通過する。相席のフランス人も下車する。ザルツブルグを出ると本当にのどかな田園風景(とは言っても田んぼは無いが)の中を、列車は東へと走る。リンツをすぎる。西ドイツと異なりオーストリアの風景はのどかである。車窓左側には、時々ドナウ川が見え隠れする。まだ、大河の趣は無い。やがて列車はウィーンに近づくが、大都市に到着するという感じではない。ミュンヘンに到着するときのようなうきうきする感じが無いまま、物足りない感じのままでウィーン西駅に到着した。

ウィーンは音楽と芸術の都としても有名だが、東西両陣営の接点として国際的には非常に重要な都市であり、国連の施設もある。また、スパイが暗躍する町としても有名である。駅で両替。マルク(当時 75 円相当)からシリング(約 12 円)へ変わる。ウィーンでの宿は、出発の前に先輩からヒュッテルドルフのユースホステルがいいと聞かされていたので最初からそこに決めてあった。Sバーンに乗りさらに地下鉄 U4 に降り変える。途中シェーンブルン宮殿のそばを通り終点のヒュッテルドルフへ。

地下鉄はとてもきれいだ。乗っている人も非常に上品だ。さすがウィーンだと思った。

駅を出て、ユースホステルの場所を聞きながら歩く。非常にのどかだ。大都市のなかの地下鉄の終点の駅周辺とは思われない。小高い丘の上に、これまたきれいなユースホステルがあった。坂道の途中で、一人旅をしている西ドイツの女の子と一緒に話が弾んだ。彼女は一人でブダペストに行くとのこと。東欧圏の中でもハンガリーは比較的開放政策をとっており、旅行がしやすいとなっている。ドナウの真珠と言われる、ブダペストはやはり誰もが見たいと思っているものだ。



(各都市の市電などのチケット)

ユースホステルでどうせ空いていないだろうと思いつつ、ツインルームはあるかと聞いてみたら何と Ja(Yes)!2泊することにした。荷を降ろし、地下鉄で町に出る。3日間の地下鉄・市電のフリーパスを買う。乗り換えの駅で、新聞売りの浅黒い男たちを見かけたが、これはルーマニア人とのことであちこちの駅で見かけることになる。東西の接点としてのこの町の位置づけを実感する。地図で見てもウィーンはかなり東に位置し、プラハよりもずっと東にある。オーストリアとチェコスロバキアとの国境は 50km ならず、かつてはブラチスラバ（現スロバキア共和国の首都）とのあいだには通勤電車も走っていたと聞く。赤と白のかわいい市電に乗り、市内を巡る。有名な国立オペラ劇場、また、オットー・ワグナーの作品であるカールスプラッツ(Karlsplatz)の地下鉄駅など、いかにもウィーン的である。国際河川たるドナウ川を見たくなり地下鉄で船着き場に行ってみる。ここまで来るとさすがに広い。貨物船も通っている。さらにブダペスト行の船も見える。面目躍如である。ドナウ川の右岸には国連の建物も見える。帰りも地下鉄で。ウィーンの地下鉄駅ではエスカレーターには”ビッテ・レヒト・シュテーエン”（右に立って下さい）と表示してある。つまり、左側は急ぐ人のために開けておくということで、このシス

テムや、人がステップに載って初めて動き出すエスカレーターなど、便利さや省エネのための工夫がヨーロッパの西側先進国では多数見られたが、このとき日本ではまだこのようなことはなくエスカレーターは乗ったら、人がいっぱいでは動きが取れないというのが実情であった。ヒュッテルドルフのユースホテルに戻る。そばに教会がありシスター達を通る。とても小奇麗で、静かで素晴らしいユースホテルである。ヨーロッパで利用したものの中で最上級であった。ゆっくりと旅の疲れをとることができた。

ウィーン 2 日目、晴れ、終日個人行動とする。私は再び、ドナウ川がみたくなり地下鉄を乗り継ぎ船着き場にやって来た。ドナウの河岸を散策する。ゆうゆうたる流れで、私は、ヨハンシユトラウスの” 美しき青きドナウ ” を口ずさみたくなった。

船着き場のレストランに行ってみると、オーストリアの国旗を掲げて何かのセレモニーをしていた。生バンドの演奏があり、市長の様な偉そうな人が挨拶していたが聞いているのは、私とほかの 2,3 人の老人のみであった。ウエイトレスの人がいかにもウィーン美人といった感じの人だったので、写真を撮らせてくれないかと頼んだら簡単にとらせてくれた。



(レストランのウエイトレス)

近くには第三の男で有名な、プラターの観覧車も見える。そこから、地下鉄やらを乗り継いでベルベデーレ宮殿に向かう。途中、ドナウ運河を通るときなど、かつての強大なオーストリアをしのばせる町の光景であった。

ベルベデーレ宮殿では、上宮 **Oberes Belvedere** からのウィーンの景色はぜひ見ておくべきだと書いてあったので期待していったが、これはいささか期待外れであった。夕暮れどきだとよかったのかもしれない。そこから市電で下って、聖シュテファン大寺院に行った。地下のカタコムベにも行って見た。オーストリア歴代皇帝達の内蔵が保存されているという白い壺があり、白骨が山積みされていた。近くの美術館では東山魁偉の作品展が催されていたので、懐かしくて見に



行った。その美術館の食堂で昼食にした。昼食後はシューンブルン宮殿に行って、広大な敷地内を散策した。これだけでも結構疲れて、本日はもうユースホテルに戻って休んだ。



(オットー・ワグナー作、カールスプラッツ駅)

その翌日は、まずドナウ川クルーズの旅行社に行ってブダペスト行の船の案内をもらう。ついでケルントナー通り(Karntnerstrasse)というウィーンで一番繁華だといわれる通りを散策する。昼飯は、この通りのカフェテラスで。美術史博物館に行ってグスタフクリムトの作品を鑑賞した後、ホーフブルグ宮殿(ハプスブルク家の王宮)の周りを散策。ここウィーンはRing(リンク)といわれる環状道路に沿って、オペラ座、王宮、国会議事堂などがあるので、ここを走る市電に乗って見て回った。

ウィーンの最終日、この日は曇り時々雨。本日の第一番の仕事は、ハンガリー大使館に行ってハンガリービザを発給してもらうこと。通常料金240AS(オーストリアシリング)に320AS上乗せして、エクスプレスサービスで1時間ほどで発給してもらう。いよいよ東欧への出発である。マジャール語の文面が、旅情をそそる。

次いでウィーン西駅に行って、ブダペストまでの2等片道切符を手に入れる。ブダペスト行列車の発車が午後なので、西駅周辺を散策する。今まで旅行してきたところでも地球の歩き方を手にした旅行者を多数見かけたが、さらにハングル文字の地球の歩き方も存在することがわかった。つまり、韓国の若者も同じような旅行をしているのだ。駅近くの郵便局で実家に絵はがきを出した。いよいよ共産圏に入ると。

これは帰国してから感じたのだが、自分が出した絵はがきはるばる海を越えて日本に着いているのを見るとその時のことが思い出されるし、出された方もうれしいし特に両親にはまめに

してやると安心してくれるし、よいのではなかろうか。

窓口の女性に” ヴィフィール・コステン・ナッハ・ヤーパン・ミット・ルフトポスト?” 日本まで航空便でいくら?と聞くと” フュンフ・ウント・フュンフティヒ” との答え、そのまま略すと 55AS で約 700 円近くになる。あまりに高いのでびっくりして聞き返す。”

“エントシュルディグング。5.5AS。” 英語的に” 失礼しました。5 シリング 50 ギルダースです。” と言い換えてくれた。笑顔であやまってくれて、しかもいかにもウィーン美人といった感じの若い女性で、非常に感じが良かった。 (下：雨のウィーン市街)



午前中には雨であったが、午後には徐々に天気が回復し、出発のころにはすっかり晴れ上がった。これからブダペストに向かう列車は、先日ミュンヘンから乗車したのと同様、ブダペスト行のオリエント急行である。6人乗りコンパートメントに陣取る。しばらくすると、バルセロナから来たというエバと恋人のアレックス。さらにしばらくして、ニューヨーカーのリサと恋人のメキシコ人ホセが乗り込んできた。皆、目的地はブダペスト。雨上がりのウィーン西駅を、オリエント急行はゆっくりと発車した。これから、いよいよ共産圏の旅が始まるのである。

### 東欧編 (ハンガリー・チェコスロバキア・東ドイツ)

程なく 6 人、自己紹介をして英語で会話が弾んだ。それにしてもラテン系の人々は陽気だ。知的なアレックス、黒髪の典型的スペイン美人のエバ、クールなニューヨーカーのリサ、非常に陽気なメキシカンホセ、そして本間と私。いろいろな話をした。彼らの一番の興味は、日本人が皆、空手の達人なのかということ。丁度、その頃、空手映画や香港製のカンフー映画が特にス

ペインではやっていたらしく、その影響でそう思い込んでいるらしかった。(このことは、私がスペインを旅行するときに非常に役にたった。)私はそんなことは無いと答えてやった。しかし、ホセが”おれも日本語が話せるよ”というのでしゃべらしてみたら”わざあり””いっぽん”と柔道や空手の判定の用語であり、彼が日本の格闘技に興味を持っているのも事実のようであった。私はフラメンコを観たいと思っていたので、どこが一番よいか聞いて見た。エバとアレックスはバルセロナやマドリッドではなくグラナダやセビーリアのものを見に行くことを勧めてくれた。フラメンコギターの話になり、私はパコ・デ・ルシアも好きで聞いているという、スペイン人はあまり彼のことを評価していないらしく、むしろアンドリュー・セゴビアとかの方が有名らしかった。

また、来年はバルセロナオリンピックなので、町中建設工事をしていると教えてくれた。バルセロナオリンピックの小旗をくれた。ホセはメキシコは治安が悪い。特にアステカは行かないほうがよい。夜ならば間違いなく強盗に遭い銃口を突きつけられるであろうと話した。スペイン語と日本語の数の数え方を教えあったりブダペストまで盛り上がった。今回の旅行では、彼らをはじめスペイン人やラテン系の人とは非常に相性が良かった気がする。

ウイーン郊外はすぐに牧歌的な風景になり、小一時間程度走ると大平原の中でオーストリア・ハンガリー国境を迎えた。ここで初めて、今までと違った入国管理を経験することになる。いかにも鉄のカーテンをほうふつとさせる国境を越えるとハンガリーの兵士と入国管理官が乗り込んできた。この国境こそが、その3ヶ月後の東欧革命において重要な役割を果たそうとは想像もつかなかった。西ドイツへの出国を望む東ドイツ国民がこの国境地帯に終結、それに対してハンガリー政府は国境を開放、堰を切ったように人の流出が始まりそれから怒濤のように革命が進行したのであった。パスポートチェックをする。ハンガリーは東欧の中でももっとも自由化が進んだ国でもあり、いかめしい中にも入国管理官や兵士の態度もフレンドリーであった。私たちも6人も仲間がいたので全然緊張しなかった。ホセがまた、持ち前の陽気さで兵士にありがとうとハンガリー語で何というのか聞いていた。我々は、しばらくこの言葉を乱発することになる。

ここからブダペストまではひたすら大平原のなかをひた走る。一面のヒマワリ畑。美しい。スペインもそうなのだろうと聞いたら、スペインはもう盛りが過ぎて、私が行くころにはあまり美しくなくなっているだろうとのことだった。たそがれのハンガリア大平原の中を列車はひた走る。時々貨物列車とすれ違うが、そのたびに糞尿のにおいが室内に充満する。エバはたまり兼ねて、コンパートメント内に香水を散布しさらに衣服に悪臭がつかないようにと一人ひとりに香水のスプレーを貸してくれる。やがて小高い丘が見えてきたら、だんだん大都会に近づいてきた雰囲気となりやがてブダペスト東駅 **Keleti Palyaudvar** に滑り込んだ。

不思議な響きのハンガリー語のアナウンス、ちょっと暗い駅構内、ヤミ両替のルーマニア人と、ここはまさしく異国。今まで回ってきた国ではあまり感じえなかった、まさに異国の雰囲気であった。本日は、皆で同じところに泊まろうということになり、一緒に宿を探すことになった。ハンガリー通貨のフォリントに両替を済ませ、駅前を歩く。駅で、さらに男一人女2人のスペイン人グループと合流した。彼らは、サンセバスチャンから来た兄妹と従姉妹とのことだった。町

の雰囲気は西側とは全く異なる。何となく暗いし、走る車もぼろっちい感じ。とにかく中心街の方に向かって歩きながら宿を探すことにしたが見つからない。途中ハンバーガーショップでそれぞれ夕食を買い、立ち食いしながら歩く。

驚いたのはアレックスが私の飲んでいて水を求め、彼の食べていたパンを勧めてきたことだった。最初戸惑ったがありがたく頂いた。驚いたことに皆で回し食い、回し飲みである。私が飲んでいてミネラルウォーターをビンごと、ラッパのみで皆で飲んだ。東欧圏では、ブダペストはドナウの真珠、東欧のパリと言われるだけあって、にぎやかだがどこも暗い、またなんとなく雑多で西欧の町のような洗練された雰囲気は無かった。しばらく歩いていたが、ホテルが見つからず、今度はホセが公衆電話からあちこちに電話をし出した。あちこち交渉しているようだ。やがてにこにこしながら戻ってきた。全員分宿が取れたとのこと。ホセ大活躍である。皆でバスに乗ってドナウ川を渡って、丘の上のユースホステルに行った。バスの中には兵士がたくさん乗っている。西側とは全く雰囲気が違う。私と本間が一つの部屋。ホセは上手く部屋を取ってくれた。今までとは、全く違う東欧での第一夜が始まった。西欧とは全く雰囲気が異なる。

翌日、朝ユースホステルをチェックアウト、昨日の仲間達と別れた。本日の仕事はまず、共産圏用の学生証を **EXPRESSZ** で発行してもらうことと、本日の宿を取ることである。バス停で国会議事堂近くの自由広場 **Szabadsag ter16** 番の **EXPRESSZ** に行けるバスを教えてもらってそれに乗る。いろいろな人が乗り込むが兵士の数も多い。これは西側の国ではついぞ認められなかったことである。バスはくさり橋で、ドナウ川をわたる。前に座ってる人が”私も日本の横浜に住んでいたことがある。”と日本語で話しかけてきてくれた。そして東駅の近くに日本人がやっているレストランがあることを教えてくれた。

**EXPRESSZ** で共産圏用の学生証を発行してもらう。ロシア語の記載もあり、いよいよソ連の影響圏内に入ったことが実感された。町の停留所でメトロと市電の一日乗車券を買い、メトロで東駅に向かった。やはり雰囲気が違う。全体的に雑多で汚い感じがした。今度は東駅の **IBUSZ** (イブス) で今晚の宿を確保した。プライベートルームというまさに個人の家で、安く個人の家を貸してくれるものでブダペストには多い。それは、東駅間近のアパートの一室という感じで、ベルを押すと老女が出てきて部屋を見せてくれた。広い 12 畳ほどの部屋で、ツインベッド、台所やら全てついている。一泊であること、翌日は夕方遅くに出ていくことも可能か聞いてみる。”**No problem!** “、これは、これから東欧圏では頻繁に聞く英語の一つになる。ただし、部屋を出るときに鍵をかけることを忘れるなということ念を押された。荷物をおいて先ほど教えてもらった、東駅近くの日本人の店を探しに行ったら見つからず、結局大衆食堂のようなところで食べる。少し薄汚いがやたら雑多と安い。

再び部屋に戻ると、本間はやはりこの東欧圏の空気にあまりなじめない様子で疲れていた。部屋で休みたいとのこと。私は、先ほど手に入れたフリー切符を片手に町に飛び出した。人でごった返すメトロに乗り中心街の方に向かう。ブダペストでは、トロリーバスが走っている。トロリーバスとは架線の下を、ポールから電気を供給されて走る連接バスで、中国や北朝鮮などの映像

で良く出てくるいかにも社会主義国といった感じの乗り物である。町々にはなぜか、アメリカ国旗とハンガリー国旗がたくさん掲げてある。(これは、のちにその理由がわかる。)確かに町は、にぎやかで活気がある、だが何となく雑多で、東京の下町の商店街のようである。



(ブダの丘から望むドナウ川と、国会議事堂)

黄色い市電に乗ってブダの丘に行ってみることにする。程なくして、軍服のような制服を着た女車掌が検札をする。何となく緊張したが、どうということはない。市電はマルギット橋でドナウ川を渡る。ドナウ左岸に国会議事堂の美しい姿が見える。モスクワ広場で降りて坂道を上ると漁夫の砦のある高台に至る。このころには曇り空がきれいに晴れて、ブダペストのすばらしい景色が現れた。ドナウ川とブダペストの町のすばらしい眺め。今まで、見た景色の中でも忘れられないものの一つである。ブダペストがドナウの真珠と云われるのも納得できる。夜景を見たら、まさに真珠のようなのだろうがそれはできなかった。ここにはヒルトンホテルもあり、外国人観光客も多い。大道芸人もいて、バイオリンで例のハンガリアン舞曲をひいている。さらにここからドナウやブダペストのすばらしい眺めを見ながら、ブダの王宮へ。ここブダの丘は、最後までドイツ軍が陣取り、ペスト側のソ連軍と撃ち合ったところだそう。くさり橋に向かって降りていく途中にナショナルギャラリーがあり、ムンカーチ、ミハーイなどのハンガリーを代表する画家の絵を見たがさっぱりわからなかった。ちなみに学生証を見せたら入場料はただだった。

このカフェテリアで休んでいると、日本人のおじさんが話しかけてきた。満面に笑みを浮かべて”やあやあ、これはなつかしい、日本の方ですね。”このジーンズはすばらしい、やはり生地がいいですね。”と一方的に話しかける。私は、これは詐欺かなんかに違いないと最初警戒したが、話しているうちに、本当に日本人が懐かしいのだとわかったし、なかなかの人物であるこ

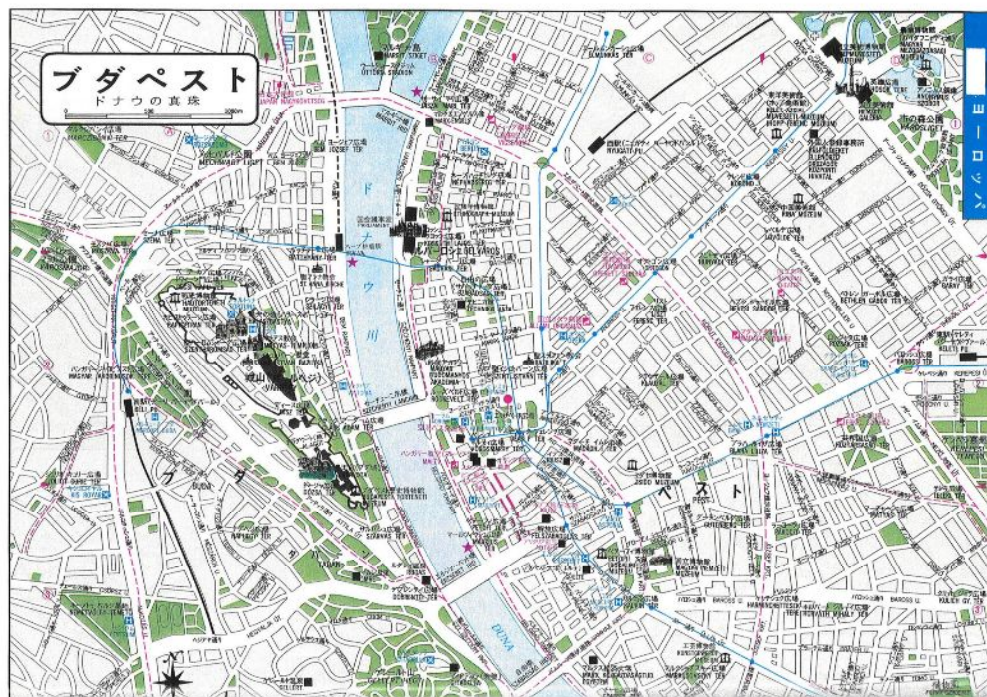
ともわかった。彼は合衆国で歯科医を営み、ABC テレビにも出たことがあるらしく写真もみせてくれた。タイから、陸路でしかも貧乏旅行でインド、パキスタン、イラン、トルコ、キプロス、ギリシャなどを経て、ようやくこのブダペストにたどりついたとのこと。やはり日本人が少ない東欧でありとてもうれしかったらしい。いろいろとおもしろい話を教えてくれた。” 今日この町にだれが来ているかしていますか？” ” いえ” ” ジョージ・ブッシュが来てるんですよ。あのアメリカ大統領が” ” へえ、そうなんですか。なるほどそれで街に星条旗があふれていたんだ。” ---これがのちの東欧革命の前兆であることなど知る由もなかった。イランはイスラム原理主義の戒律が厳しくて、本当に緊張した。出入国は非常に厳しかったが、” おしん” のことを話すと結構簡単に通してくれたことを話してくれた。” おしん” とは、その数年前に人気のあったNHKの連続テレビ小説で、ヤオハンの会長がモデルになった、少女が苦勞しながら成長し世界の大スーパーの経営者になっていく物である。イランではなぜか家庭用ビデオの普及率が良く、またなぜかこの” おしん” というドラマの吹き替え版が非常に人気があるらしかった。トルコに入国したら、緊張がとれて本当に生きた心地がしたことなど、いろいろと楽しい話をしてくれた。” いやあ、久しぶりに楽しいひとときを過ごしました。良いご旅行を！” といって去っていった。私にとっても非常に楽しいひとときであった。再び、ドナウを渡りペストの街へ、メトロにのって宿に戻る。本間は寝ていたが、起きると入れ違いに部屋を出て行って、街の散歩に出かけた。しかし何となく機嫌が悪い。もともと東欧にくることに乗り気でなかったのだ。ストレスがたまっただのであろう。夜、彼が帰ってきてから今後の予定を話した。私は予定通り、チェコスロバキアを経てベルリンに行くことに、本間は翌日早くオーストリアに戻るようになった。



(ブダの丘から、ドナウ川と“くさり橋”)

翌朝、本間を東駅に見送り、私は東駅のIBUSZでベルリンまでの切符を買うことにした。行ってみるとそこは長蛇の列。皆、東ドイツ国民のようだ。東ドイツ国民は東欧圏内の旅行は許されているとのことで、東欧圏内にあつて比較的自由的なハンガリーは人気が高く、バラトン湖というリゾート地への旅行者が多いと聞いたことがある。

ようやく自分の番になる。ハンガリーをはじめ、東欧圏は英語よりもドイツ語の方が良く通じるとのことなのでドイツ語で用を足す。”ベルリンまでのクシュットありますか？””ないよ””じゃ、寝台ありますか？””あるよ”切符は午後4時にできるからその時とりにきてくれとのこと。仕方がないから、観光をすることにした。いよいよ、ここからは全くの一人旅である。しかも日本人の少ない東欧圏で--何となく心細くなった。とりあえずメトロで自由広場へ。ここはメトロの十字路であり何度も利用することになる。乗り換えて英雄広場に行く。これも観光のモニュメントなのだが、なぜか薄寂しい。考えてみれば、いままで一緒にいた本間と、昨日あった人以外、日本人には全く会っていない。



英雄広場からアンドラーシ通り（別名：人民共和国通り）というブダペストのシャンゼリゼといわれる通りを歩く。確かに東駅前のラーコーツィ通りと比べると洗練されてはいるが、西側の国の通りと比べるとまだまだあか抜けない。途中本屋に立ち寄りブダペスト市街のポケットアトラスを買う。日本人はやはり珍しいと見えて、レジの娘さんの笑顔の裏にも好奇のいろが伺える。ひととおり散策した後、東駅に戻る。立ち食いのスタンドでジュースを買い休む。私がドイツ語で用を足すためか、皆”あなたはドイツ人か？”と聞いてくる。このあたりで欧米諸国と日本の感覚の違いを痛感した。日本人は単一民族だから、肌の色が異なり、顔つきが異なれば日本人で

はないいわば”外人さん”ということになってしまいそうだが、欧米では肌の色、顔つきがいくら違っていてもドイツ国籍があればドイツ人、フランス国籍を持っていればフランス人なのであろう。これこそまさにコスモポリタンな感覚というものなのであろう。

駅前のストアでパンやらジュースやらを買って部屋で食べた。やたら安かった。

確かに共産圏内の国であっても、比較的豊かなのであろうかモスクワの空港でのレストランの品揃えなどから見ると、物資は豊かに市場に出回っていると感じた。町を走る車はおそらく東独製なのであろう。トラバントやそれに似た車が大多数である。車体は、紙に強化プラスチック塗装をしたものや木できてきているようだ。そんな中で、日本製のセリカが走っていて、おそらく政府高官のどら息子が乗り回しているのだらうと思った。本日は曇り、一人っきりになったし何となくもの悲しい。

遠くに病院が見え、救急車の音が聞こえる。昼寝をして16時になったときに、東駅のIBUSZに切符を取りに行った。ブダペスト-ベルリンの片道2等切符とプラハまでの寝台券。あわせて300フォリント、なんと日本円で700円程度。私は我が目を疑った。やはり共産圏は物価が安いのだ。本日23:30ブダペスト西駅発のパンノニア急行でプラハ着9:41であった。ちなみにハンガリー語で駅はパーヤードヴァールというらしい。東がケレチで西がニュガティである。発車が夜中なので、宿のおばさんがくるまで休ませてもらおう。ベッドに横になり、今後の経路を考える。一人きりになり、本日、日本人に全く会わなかったことなどを考えると共産圏に行くのもかなり不安な気がする。オーストリアに戻ってしまうのは簡単だ。しかし、百塔の街といわれるプラハも見ておきたい。もうサイは投げられた。予定通り、ブダペスト-プラハ-ベルリンの経路を行こう。ベルリンからは、ベルリンに着いてから考えよう。

夕方、7時頃、老婆とその娘さんか嫁さんかわからないがやってきた。さよならとお礼を言った。娘さんが、ピワのような果物をたくさんくれた。私は、お礼にするものがなかったので、持ってきていた農協ご飯のレトルトパックを差し上げた。

メトロに乗り、自由広場駅で乗り換えて西駅に。西駅は全面ガラス張りという感じで、重厚な東駅とは雰囲気全く異なる。後日、西駅を設計したのはあのエッフェルであることを知るが、なるほどと納得した。西駅の食堂で夕食をとる。ここでもドイツ人かと聞かれた。共産圏だから犯罪は少ないと聞いていたものの何となく不安。駅のベンチで列車の入線を待つ。駅の雰囲気も、待つ人々も雰囲気が西側とは全く異なる。人はたくさんいるが誰もが無口である。やがて23:00頃、ゆっくりとパンノニア急行が入線してきた。戦争映画で見たような重々しい入線の仕方である。車両はみな古い。自分の部屋番号をみつけて入り込むが、中にはまだ誰もいない。3人部屋であった。同室者が変な人間でなければ良いがと思っていたが、結局プラハまで誰も乗ってこず、私一人の個室状態であった。

23:30何の前触れもなく静かに列車はホームを滑る出す。ブダペストの街の明かりが徐々に車窓から遠ざかる。これからいよいよディーブな共産圏である。期待と不安。どちらかという不安のほうが大きかった。1時間も走った頃か、スチュロボという国境駅(ブダペストから約80km)のようだ。ドアをロックする音、遠慮というものがない。ドアを開けると、軍服



のような制服を着たチェコの入国管理官の男 2 人と女 1 人であった。威圧的に” パスポート、プリーズ！” 情け容赦ないという感じである。パスポートとビザを見せる。実は日本で手に入れたチェコのビザには本籍が間違っ て YAMAGATA と記されており、パスポートと食い違っている ので、これが指摘されたらなんといおうかと思っていたが、ばれなかった。” カメラ？” ときかれ銘柄をきかれた。” ニコン” ” ヤー”、別の係員が” アイネ・ニコン” と記す。その後はぶっきらぼうに挨拶もせず にドアをしめ行ってしまった。ますます不安が広がる。これが共産圏なんだ。まあ何とかなるだろう。じっくり共産圏というものを味わってやろうじゃないかと、腹を据え ると、深いねむりに入った。

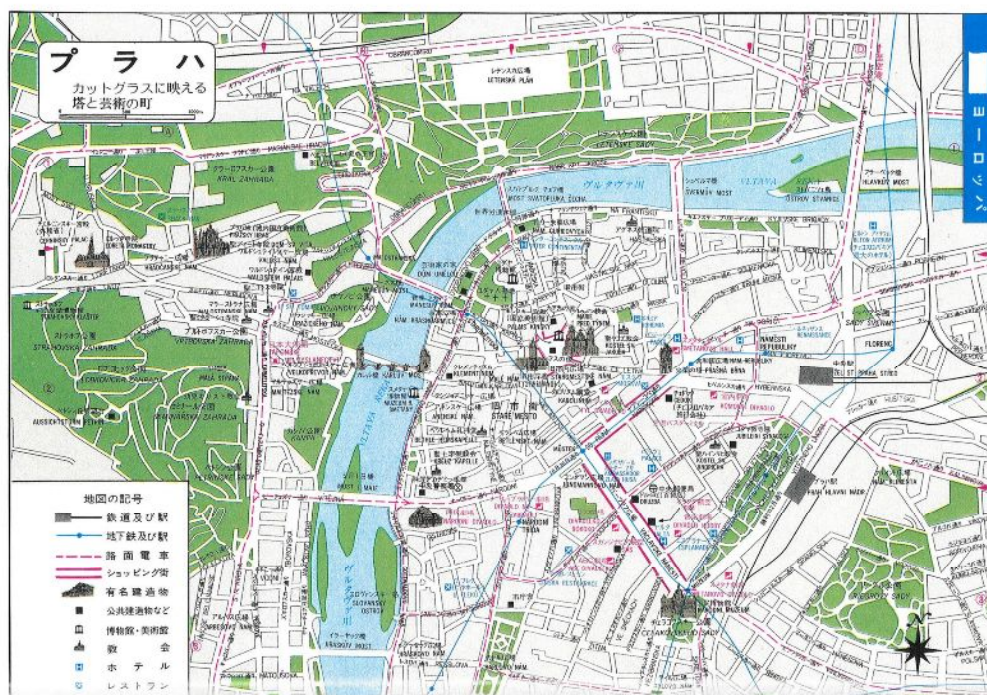
目を覚ますと、朝靄の中を列車が走る。7:00 頃である。ブラチスラバは 3:44 ブルノは 5:57 発だから、今はプラハの 200 km ほど手前を走っているようだ。外は田園風景と森が交互に現れる。所々に民家が見え隠れする。窓が汚いのでよく見えないが、曇り空のボヘミア平原を列車はひた走る。プラハは今回の旅行では、常に興味を奪ってやまない街だったので期待もあるが、共産圏のまっただ中ということもあり、単身乗り込むことに非常に不安があった。やがて、周囲が街らしくなってきたかと思うとプラハだ。9:00 過ぎプラハ Holesovice 駅に到着した。時刻表では町中のプラハ本駅(Praha Hlavni nadrazi)に到着すると書いてあったのに、町はずれの駅に着かれてしまって困ってしまった。両替もない。中心街までは地下鉄があるようだが切符が買えない。何とも寒々しいプラハの一日の幕開けであった。

優しそうな婦人がいたので話しかけた。” 中心街に行きたいのですが、全くコルナがありません。(コルナはチェコの通貨)” 婦人は私に自分の回数券から一枚とって私にくれた。一緒に地下鉄に乗って、私はガイドブックのチェコの写真を見せた。何かお礼をしなければと思ったが、チェコでは外国人との闇両替をした市民はかなり厳しく罰せられると聞いていたので、この婦人が変な疑いをもたれても困るなと思うと何もあげれなかった。結局丁寧に お礼を言ってわかれた。ムステークという名の、市の中心地と思われる駅でおり地上に出てみた。プラハの地下鉄は、ブダペストのものに比べると格段にきれいであった。駅も何となくこぎれいであった。ただ何となく全体的に冷たい感じがした。

地上に出て見回すと、変なおじさんが近寄ってきた。警戒しながら話を聞くと、私のうちに泊まらないかという。日本人が書いた推薦状も見せてくれた。ぼろぼろになったその紙には” このおじさんのいうことは信用しても良いです。宿もよかったし安心してとまれます。” と、確かに日本人の署名入りで書いてあった。結局一晩 8 ドルで泊めてもらうことにした。そうと決まると話ははやい。おじさんは、私にさっきお婆さんがくれたのと同じ地下鉄の回数券をくれて、一緒に地下鉄に乗った。ソコロフスカという駅で降り、しばらく路地を歩いておじさんの家につれて行ってくれた。家に入るとまさにチェコスロバキア市民の家であった。その中の一室をわたしに貸してくれた。コーヒーを出してくれたが、今まで飲んだことのないようなもので、そこにコーヒーのかすがたくさん沈んでいる。後に、これがトルコ風コーヒーなのだということがわかった。息子のヤルダを紹介してくれた。おじさんに、プラハにきたんだからピルゼンビールを飲み

たいといったらプラズドロイという銘柄を紹介してくれた。私は、ピルスナーウルケレを期待していたのだが、一般の人にはそちらの方が人気があるであろう。おじさんがいろいろと話をしてくれた。私がドイツ語も少しわかることがわかったと、ドイツ語でしゃべりだした。やはり、英語よりもドイツ語が通じるのだ。なにやら闇両替には気をつけろといているようであった。両替をしなければならないという、ナブシコーペ通りのチェドック（国営旅行社）に行けと教えてくれた。地下鉄の回数券をまた一枚くれた。

私は、再び地下鉄に乗ってムステークに行って、プラハの繁華街といわれるナブシコーペ通りを散策した。プラハの街は美しかった。こぎれいである。時々”change money”と行って来る人がいるが、ブダペストのようにおおっぴらでなくこそこそやってくる。やはり闇両替の取り締まりが厳しいのであろう。チェドックで40US\$の強制両替をした。またチェコでは個人の家に泊まるときには警察に届け出なければならないと書いてあったが、一晩だけならその必要はないといわれた。なかなか愛想の良い、かわいい娘さん2人で、緊張していた私の心も非常にほぐれた。プラハの地図をもらう。



本日、とにかくいっぱい見て回り、足りなかったらもう少し長く滞在しようと考え、とりあえず明日の列車の座席指定だけとおこうと思った。別の窓口に並ぶ。9:50発の、プラハまで乗ってきた同じパンノニア急行のプラハからベルリンまでの指定席、52号車19番。やはり非常に安かった。並んでいるとき、クエートからきているというアディフとその連れが話しかけてきた。しばらく話をしたら”じゃあ”とっていなくなってしまった。いったい何だったんだろう。かれらはプラハに何をしにきているんだろう。それは聞けなかった。かれらの祖国は後に、イラ

クに侵略され、湾岸戦争という全世界を巻き込む戦乱のまっただ中になるのだが、そのときはそんなことなど予想もつくわけもなかった。

私は非常に気分がほぐれ街の散策を始めた。火薬の塔、有名な 12 使徒時計（旧市庁舎の天文時計）を見に行く。さすがにここは観光客が多いが日本人は誰もいない。近くのカフェテラスでコーヒーを一服。やはり、プラハにきて良かった。ここでついでに東ドイツ(DDR)のビザをとっておこうと思いつき、通行人に東ドイツ大使館の位置を聞いて、教えられたとおりに歩くが、全く見つからない。地図をよく見てみると教えられた場所と全く異なるところにあるようだ。これはプラハ市民の人が悪いか、あるいは DDR が嫌われており、そこに用事のある人間だから意地悪されたのかどちらかであろうが、おそらくは後者であろう。

有名なカレル橋、ブルタヴァ川、プラハ城を見ながら川沿いの道を歩く。おもわず、スメタナのモルダウを口ずさんでしまう。国民劇場の建物を見ながら歩くと、DDR 大使館だ。ここに至るまでにプラハの市内を走る車が非常に少ないことに気がついた。車はやはり、東独製のトラバントかそれに類するもの。信号機も少なく、交通整理の警察官がたっている。写真を撮ったらおこられるかと思ったが何もいわれなかった。赤と色のツートンの市電がくすんだ中世のような街を走っている。なんとエキゾチックでノスタルジックな風景なのであろう。写真を撮りまくったが注意もされなかった。(残念ながら、プラハ～ベルリン～コペンハーゲンでとったフィルムはマドリッドの写真屋で現像が失敗されてしまい日の目を見なかった。)

東ドイツ大使館は、非常にいやな感じであった。私がよばれて中に入るといきなり自動ロックがかけられた。”明日、西ベルリンに行くのだが、(私は西を強調した。)東ドイツ領内を通過するのにビザは必要か?””必要ありません”な一んだ、なんということはなく用は足りてしまったが、東側の国家の嫌らしさを垣間見た気分であり後味が悪かった。

再び、ナプシコーペ通りに戻るのだが、途中の町々の美しさは息をのむようであった。パーツラフ通りを国民博物館に向かって歩く。ばかでかい公園のような通りである。3ヶ月後に、ここが東欧革命の重要な舞台になることなど全く伺いしれない。ここでもカフェテラスに入ってコーヒーを飲む。プラハはとても静かで落ち着いた街である。何となく寂しい気もするが、私はとても気に入った。非常に気分も落ち着いた。再び、ナプシコーペ通りに戻ると小雨が降り出した。かさがほしくなり通行人に、近くにデパートはないですかとドイツ語で聞いたら、やはりきれいなドイツ語で”カトバ”というデパートを教えてくれた。行ってみるとやはりものが少ない。共産圏のデパートはこんなものかと、最上階から下までじっくり観察した。

結局傘は買わなかったが、店を出る頃には雨はやんでいて、しかも日が射してきている。ナプシコーペ通りの本屋に入って、プラハのきれいな地図を買う。そういえば、両替したお金はまだかなり残っている。昼飯はどうしようかと思い、両替したコルナを数えてみると物価を考えると大金である。出国の時にどうせ持ち出せないのだから、ある程度だけのこして使ってしまうとばかりに、通りのレストランに入ってコース料理を頼んだ。もちろんピルゼンビールももらう。ピルスナーウルケレであった。支払いはカードか US\$か、コルナかと聞かれコルナと答えたらがっかりされた。やはり、外貨がほしいのであろう。クネードリキというチェコの料理も出た。ビ

ールとワインで心地よくなり、今度はプラハ城に行くことにした。カレル橋を歩きモルダウを口ずさむ。橋を渡ってフラチャニーの丘を登り、そこのバルコニーからは百塔の街や、ブルタヴァ川が一望の下である。ついでプラハ城内を散策し、黄金小路という美しい通りを下って橋のたもとの地下鉄の駅へ。途中、公衆便所に入るが、ここでは掃除のおばさんが常勤していて、用を足した後チップを払うのだがそのためか非常に清潔であった。

地下鉄で再びムステークに行く。この駅はもう何度も利用している。外に出たところで一人の若者が英語で話しかけてきた。”プラハはどうですか？””とても美しい、素晴らしい街ですね。””わたしもそう思います。私はカレル大学の学生ですが、あなたは日本人ですか。””そうですけど””日本の女性は素晴らしいと聞いてます。是非文通したいので紹介してください。””いいですよ。”彼は、私に名前と住所の書いたメモをくれた。再びナプシコーペ通りに戻る。プラハはそんなに大きい街ではない。もう見るところは見てしまった気がしたので、あすは予定通りベルリンに旅立つことにした。地下鉄で宿に戻る。

ソコロフスカの駅から、おじさんの家に。おじさんはとても暖かく迎えてくれる。部屋に入って休んでいると、ヤルダが例のコーヒーを持ってきてくれた。彼はチェコ語しか話せないようだが、なにやら身振り手振りで”しばらくしたら飲みに行かないか”といているようだ。”OK”しばらく休んだ後、ヤルダが呼びに来てくれて夜のプラハにつれていってくれた。私はもうこの人たちを信用している。プラハの街は素晴らしい。鉄道の高架ををわたって酒場に入ってしまった。中にはヤルダのような青年や労働者風情の人がいっぱいいた。ヤルダと席に着くと仲間がたくさんやってきた。プラズドロイで乾杯だ。仲間の中で英語ができる人が通訳をして話が弾む。やはり日本人はかなりめずらしいようで、みな私に注目している。ビールがおいしく気持ちよい。私は、かれらが喜ぶと思ってチェコ人で有名なテニスプレイヤーのイワン・レンドルやマルチナ・ナブラチョアの名を出したが、彼らにしてみれば祖国を捨てた人々であり、あまり好んではないようであった。そのほか、何の話をしたか忘れたがとにかく楽しかった。便所に行くと、他の客が珍しそうに注目する。”ヤポンスキー！ヤポンスキー！”という声が聞こえる。私は異国の地でこれだけ歓迎されるとは思ってもいなかったのが非常に気分が良かった。したたかに飲んで帰ったが、すべてヤルダがおごってくれた。

家に帰ってからも、ヤルダがもっと飲もうという。これからの会話はすべて、身振り手振り、絵を描いての会話である。チェコ語の全くわからない男と、チェコ語しか話せない男との会話である。彼は25歳とのこと。いろいろなことを話した？”日本ではテレビが何局ある？チェコでは2つだ。””日本では6局だよ”くやしがるヤルダ。窓の外を時々、ベルリンかモスクワに向かうであろう列車が通る。”チェコの人もスキーをするの？””チェコでもスキーはするよ。このソ連国境に近いスロバキアではね”といった感じ、内容は自分ではこういう会話だったつもりだが、とにかく午前3時くらいまで会話が弾んだ。私は、眠りたいとジェスチャーでいうと、”グッドバイ”をして彼も、自分の部屋に戻った。トイレはどこかと聞くと玄関の外とのこと。鍵をあけ共同トイレで用を足す。まさにプラハの一般市民の家である。すぐに良い気分ですぐに眠りに入る。

私は、翌日非常にうれしくて何かお礼ができないかと考えた。そうだ、あのおじさんがもっと

も喜ぶものといったら、新しい日本人向けの推薦状ではないか。私は丁寧に、日本語でこの宿のすばらしさをしたためおじさんに”エムフェーロング！：ドイツ語で推薦状)”と書いて渡した。おじさんはとても喜んでくれた。そしてヤルダとおじさんに、とりあえず農協ご飯レトルトパックを渡したらこれも非常に喜んでくれた。

朝いただいたコーヒーが非常においしい。おじさんとヤルダと別れて地下鉄駅ソコロフスカに行く。ホームでかわいい女の子がほほえみかけてきた。会話をしたいのだがなんといいのかわからないようであった。”わたしは日本人で、これからベルリンに行くんだよ。プラハはとても美しくてすばらしい街だね”と書いて、エバからもらったバルセロナオリンピックの小旗をあげたらとても喜んでくれた。

プラハ、ホレショビス駅、パンノニア急行の席につく。それにしてもどうして共産圏の列車はどうしてもくすんだ色合いに塗装するんだろう。もっと明るい色にすればと思うのだが。自分の席につきプラハのすばらしかった思い出を反芻し、これからの道中に思いをはせた。やがてコンパートメントに技術者らしい人々が乗り込んできていっぱいになってしまった。定刻になり、パンノニア急行は静かにプラハを後にした。曇天のボヘミア盆地。いかにも社会主義国の空の色という感じ。これからもっと、ディープな共産国、東ドイツである。

単調なボヘミア平原を列車は北上する。デーシンという国境駅に着く。チェコの係官がパスポートとビザをチェックする。私だけ、コンパートメントから出されて、車掌室で昨日どこに泊まったか聞かれた。仕方がないのでプライベート・チムマー（個人宅）といい、ヤルダの家の住所を教えた。いろいろチェックしていたが解放してくれた。私は、住所を教えたのはまずかったかなと一瞬思ったが、こういうことで住所を告げられて困るようなら、最初から住所は教えないだろうと思いきや安心した。コンパートメントに戻ると、同室の東ドイツの技術者たちがひどい扱いだ、きっと君のその赤いパスポートのためだと同情してくれた。それがきっかけで会話が始まった。

しばらく行くと東ドイツ側の国境駅バッド・シュビンメン。入国は比較的簡単である。列車はエルベ川を右に見ながら北上する。エルベ川の向こうの山々がエルツ山脈であることを一番上と思われる人が教えてくれる。一番若そうな青年とはいろいろ話した。彼の友人にドレスデン交響楽団のチェロリストがいて、東京に行ったことがあるらしいが、すばらしい街だと語っていたこと。私は、東京はいつも人で混み合っていて落ち着かないよと話した。音楽はブラームスが好きなこと。ドレスデン交響楽団の指揮者は日本人のワカスギ氏でこれもまたすばらしいのだという。私は東側の人々にとっての娯楽はクラシック音楽を聴くことなのだと、しみじみ感じながら、ブラームスの交響曲第一番の第4楽章の重厚なフレーズを思い出していた。（サントリーの”響”というウイスキーのコマーシャルに使われたことがある。）もっとも、その旋律を聴くまでには退屈な1〜3楽章を聞かなくてはならないのだが。

外は晴れていて気持ちが良い。ドイツ人にとってライン川は”母なる川”そして、エルベ川は”父なる川”といわれる。ずっと下流には、ヨーロッパ3大貿易港の一つハンブルグがある。この青年、後に彼からの手紙で、国立科学アカデミーのマルコ・ステファン博士だとわかるのだが、日本にはかなりよい印象を持っているようだ。また、第二次大戦中に同盟国であったことなども、

親近感を与えることになっているのであろう。わたしはいつか日本にきてくださいといった。青年は苦笑いをした。かわりに年輩の人が優しく” We can't go forever : 私たちは永久に行くことはできないのです。” と答えてくれた。私はしまったと思った。この人たちは自由に旅行などできないのであった。罪なことを聞いてしまったと思った。気まずい雰囲気になるかと思いきや、すぐに別の話題で盛り上がった。マイセンの陶磁器の話などをした。

国境から 30 kmほどで彼らの降りる駅ドレスデンだ。かつてはエルベ川のフィレンツェと、その美しさを歌われた、ザクセン王国の首都として栄えた街だが 1945 年、2 月 13 日米英空軍の猛爆撃で街は一夜にして灰燼に帰ってしまった。有名なツピングァー宮殿などは復元されているとのことだ。中央駅に近づくにつれて街らしくはなってきたが、どこかすすんでいて寒々しかった。また、曇り空もその雰囲気作りに一役買った。中央駅でかれらと別れた。黒っぽく灰色の街が横たわっている。そこにおもちゃのような赤と白のツートンの市電が走っているのが見える。今度は、また、たくさんの人が乗ってきた。たちまち満席になる。若者ばかり、みな年代物のようなジーンズをはいている。中央駅を出ると次は、ノイシュタット駅。コンパートメントの同室者には恋人同士もいてそれぞれは会話しているのだが、私に対するまなざしには、どこか憎しみがこもっているようでやりきれなかった。ここからベルリンまではほぼ 160 km。途中、さほど大きな街はない。車窓から見る東ドイツの景色は何となく寒々しい。時々、水色のトラバントが見える。同室の人とは、とても会話する気になれない。曇り時々雨。沈鬱な風景だ。やがて、外の景色が少しずつ街らしくなってきた。空も、時々太陽が顔を出す。

ベージュとチョコレート色のツートンの国電らしき電車が見える。第 3 軌条式らしく架線がない。日本の地下鉄銀座線や丸の内線のようなものだ。やがて、シェーネフェルトの駅名標が見える。東ベルリンの国際空港のあるところだ。西ベルリンには有名な、テンペルホフ空港とテーゲル空港がある。いよいよベルリン市街である。大都市ではあるようだがなぜか寒々しい。そうこうするうちに終点のリヒテンベルグ駅に着いた。

とりあえず、ここで東ドイツマルクへの両替をする。細かい金がないので駅前の食料品店に入った。びっくりした。入るのが順番である。店内にならぶ品はやはり少ない。とりあえずチョコレートを一つ買った。店員は全く愛想がない。これが社会主義なのだ。サービス精神もへったくれもない。S-Bahn (S バーン : 国電) の切符を買う。なんと厚紙そのものに印字しただけの安上がりな切符であった。リヒテンベルグ駅から先ほど見た、国電に乗る。ベルリン中央駅、ベルリン東駅、ヤンノビッツブリュックと過ぎ、徐々に大都市らしきが見えてくる。ねぎ坊主とあだ名されるテレビ塔が間近に見えてくると、アレクサンダープラッツ、ここが東ベルリン一の繁華街らしく、人がたくさん降りたし、街の様子もにぎやかである。しかし、心なしか寒々しい。ついでマルクスエンゲルスプラッツ、いかにも社会主義国の駅名である。ペルガモン美術館、フンボルト大学のそばを通過して、終点のフリードリッヒシュトラッセ駅である。ここが西ベルリンに抜ける関門である。外国人はこの駅をとおるか、チャーリー検問所 (チェックポイントチャーリー) を通って西ベルリンに抜けることになる。東ドイツ国民はもちろん行けない。

駅をいったん出て街に出る。やはり車はトラバント。にぎやかだが、人々に笑顔が見られない。

フリードリッヒシュトラッセ駅の横の、体育館のような建物から中に入る。たくさんの人だ。窓口に緊張して並んでいたが、比較的楽に通過でき、ホームに出ることができた。ホームはもう西ベルリンのようなものである。そばにいたおじさんが話しかけてくる。ギリシャのテキサロケから来たという画家のおじさんだった。ドイツ語で話す。つたないドイツ語で申し訳ないといったら、いいやちゃんとわかるよとってくれたのでうれしかった。

ホームに列車が入線してきた。Sバーンで、先ほどまでのと同じ物で色が黄色と赤のツートンであった。なるほど、西ベルリン市内の鉄道はSバーンも、Uバーン（地下鉄）もDR（東ドイツ国鉄）が管理していると聞いたことがあるが、どうやら本当のようだ。静かに列車が発車する。ゆっくりとシュプレー川沿いの壁にそって走る。まもなく壁を抜ける。やった西ベルリンだ。この瞬間、やっと自由を得た東ドイツ市民になったような感覚にとられる。ティアガルテンという駅を過ぎ、次は、西ベルリンの中心駅ツオーロギシャーガルテン駅（動物園駅、略して Zoo 駅と云われる。）だ。非常に近代的な明るい駅で、再び西側に戻ったことにいささかの喜びを感じた。

徐々に暗くなってきたのでインフォメーションを探したが見つからない。通行人につれていってもらった。ウイルマースドルファー通りにある安ホテルだが、どういったらよいのかわからない。バスの運転手に聞いてみたら、”このバスで行けるよ。ここに座ってな”と運転席の近くの席を示した。西ベルリンのバスは黄色い二階建てバスである。

西ベルリンは、東ベルリンとは全く異なり底抜けに明るい。壁一つ隔ててこうも違うものかと関心もした。西ドイツの都会でありながら、陸の孤島であり、実質上、米英仏 3 カ国連合統治の不思議な立場の街の繁栄を眺めた。4・5カ所停留所をすぎたところで、運転手が教えてくれた。ダンケシェーン、アウフビーダーゼーエンとってわかれた。安ホテルだが清潔であり安心した。チェックインし荷物を降ろすと、再び街に出た。久しぶりの西側の都市。明るくにぎやかで洗練されている。うれしくなった。いっぱい食べ物や、ビール、ジュースなどを買い込んで、ゆっくり部屋で食べることにした。窓からはベルリンの町並みと、時々Sバーンが走るのが見える。何とも不思議な大都会である。明日は西ベルリンをゆっくり見た後で、コペンハーゲンに向かうことにする。

翌日は、曇り時々晴れ。チェックアウトの後、バスで Zoo 駅に行く。トランスアルピーノを見つけ、ベルリンからデンマークの国境駅：ゲッサーまでの切符を買う。もちろん東ドイツの港、バルネミュンデからゲッサーまではバルト海のフェリーである。ついでベルリンの一日切符を買う。まずは、何をおいてもチェックポイント・チャーリーを見たい。Uバーンで向かう。英米仏の国旗が掲げられ、連合軍兵士が駐屯する。まだ、ここは戦争が終わっていない。まだ西ベルリンは連合国の、そして東ベルリンはソ連の占領地なのである。近くの”ベルリンの壁記念館”に入って見学する。何とも悲しい展示物である。ここのカフェテリアで昼食をとっていると、若者が相席してもいいかと聞いてきた。彼はノルウェイ人で、オスロからここまでオートバイでやってきたらしい。なんとも大胆なことをするものである。途中東ドイツ領内は大丈夫だったのか聞

いてみたが、特に問題はなかったらしい。それはすごいと感心していたら、彼は私が日本から飛行機で14時間もかけてヨーロッパに来ていることにびっくりし、日本人はそれだけのお金の余裕があるんだから、やはり金持ちなんだと感心していた。楽しい会話の後、お互いの旅を祝福して別れた。



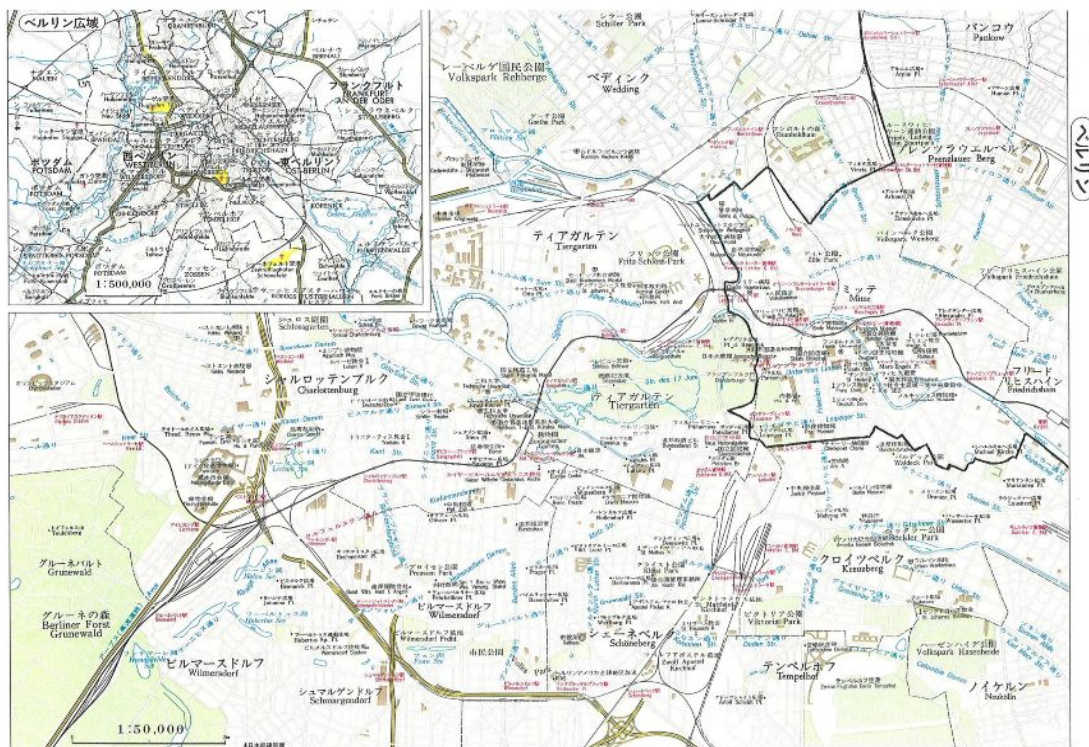
(左：プラハで飲んだビールのラベル、右：東ドイツ5マルク紙幣など)

ここからは、天気も良くなってきたことだしベルリンの壁づたいに歩いてみることにした。有名な落書きがある。ブランデンブルク門のところには大道芸人もいる。そこから帝国議会議事堂をすぎてシュプレー川沿いに歩くと、花を掲げた十字架がいくつもあった。壁を越えようとして銃殺された東ドイツ市民の冥福を祈るための物らしい。再びヨーロッパセンターのあるところに戻る。有名なヴィルヘルム皇帝記念教会が見える。虫歯というあだ名のあるその廃墟は、大戦の際の廃墟をそのままに残してある物である。その通りは西ベルリン一の繁華街クーアフルシュテンダム（クーダム）通りである。今までの東側の街からすると、全く異なる洗練された町並みである。道にはベンツやBMWがあふれている。ヨーロッパセンター内のデパートに入ってみる。何と豊かな商品の数々。東ベルリンの人々は、壁一つ隔てたこの豊かさは知っているのだろうか。西ドイツのテレビ放送は、東ドイツでも入ってしまうとのことだから、東ドイツ政府がいかにも西ドイツは貧乏にみまわれているといっても誰も信じないであろう。

久しぶりに日本料理を食べたが高そうなのでやめた。本日夜22:00発のオストゼー・エクスプレス、コペンハーゲン行きに乗るので時間がたっぷりある。Sバーンをいろいろ乗ってみる。西ベルリンも南の方は森や林がたくさんあり緑が多いことがわかる。さらにUバーンで一



部、東ベルリン領内を通過する区間があるのでどうなっているか乗ってみた。ウンテルデンリンデンは駅名は見たが、ホームは使われておらず通過であった。フリードリッヒシュトラーセ駅で乗り換えし、昨日と同じ経路で Zoo 駅に。やはりフリードリッヒシュトラーセ駅のホームは、東ベルリンにあっても西ベルリンなのである。



Zoo 駅のレストランで夕食をとった。ベルリナービールを飲んでほろよいに。そろそろ時間なのでホームに入る。コペンハーゲン行きのオストゼーエクスプレスとスウェーデンのマルメ行きの列車が入線していた。駅員はDR職員のようで非常に愛想が悪い。コペンハーゲン行きはどちらかと聞くと、ひげの大男はにこりともせず車両を指さしただけであった。コンパートメントに乗り込んで発車を待つ。今のところ私一人だ。これはゆっくりできるかも。

定刻に発車、と同時に東ドイツの入国管理官がコンパートメントにやってきた。彼は珍しく愛想が良く、日本語で”切符ください。”といい、切符とパスポートをチェックするとにっこり”ありがとう。”と云ってくれた。うれしかった。東ドイツの役人にもこんな人がいるんだなとほっとした。

壁を越え、フリードリッヒシュトラーセ駅に止まる、次はベルリン中央駅。西側の旅行者と思われる若い男女と、変なむっつりとしたおじさんが乗り込んできた。誰も挨拶しない。やはり、東側に入ると誰もが気詰まりになってしまうのであろう。リヒテンベルグ駅を出ると、街の灯も少なくなりはじめ、闇の東ドイツ領内を列車は北上する。誰もしゃべらない。若いカップルも黙ったままだ。私は眠るのがもったいないので、ずっと起きて車窓を眺めている。

ロストクをすぎると、いよいよ東ドイツの国境駅バルネミュンデである。この駅を出ると再び

列車は止まり、悪名高き東ドイツの出国管理が始まった。入念なパスポートチェックに始まり、座席の下から荷だな全部をチェックする徹底ぶりには、東ドイツのものは虫一匹も外には出さないと云うような意志が感じられた。東側に生まれなくて本当に良かったと思った。まさに収容所国家である。

30分から1時間も停車したろうか、再び列車がゆっくり動き出しフェリーの中に入る。フェリーが出航すると、デッキに出て良い旨の放送がある。しばらくすると、もう夜明けである。フェリーのデッキでバルト海を眺める。夏なのに寒々している。緯度も高いし、紛れもない北の海なのである。鉛色の海。売店でコーヒーを買って、バルト海を眺めながらたたずむ。ハンガリー-チェコスロバキア-東ドイツの印象はかなり強烈であった。鉛色の海を見ながら、感慨にふけていた。

やがて、デンマークの陸地が見えてきた。車内に戻る。朝靄の中、デンマークの港ゲッサーに到着。再び、列車が船から出される。ディーゼル機関車が牽引する。気抜けするくらい小さな駅である。今までの出入国管理が厳しかったせいか、デンマークの入国管理は覚えていないくらいあっさりとしたものだった。そのうちに、ひげの車掌が検札にきた。私はゲッサーまでの切符しか持っていなかったもので、いよいよユーレイルパスにサインしてもらうことにした。今日から使用開始である。21日間有効のパスなので十分間に合うであろう。列車は徐々にスピードをあげ牧草地を疾走する。やはり、酪農の国である。

デンマークに着いたとたんに、気むずかしそうなおじさんが急に愛想が良くなった。聞きもしないのに、今日はコペンハーゲンの親戚に行くのだと、うれしそうに話してくれた。どこから来たのと聞くと、ブルガリアだそうだ。はるばるとおじさんはバルカン半島のはずれから列車でやってきたのだ。西側の国に入り、自由な雰囲気気分がほぐれたのであろう。確かに私自身、ハンガリー、チェコスロバキア、東ドイツと旅行するにつれ、何とも言えない息苦しさを感じてきた。私も、再び西側の国にこれてうれしくなった。やがて列車は、小雨そぼ降るコペンハーゲン中央駅に滑り込んだ。今日から再び、西側諸国の旅が始まるのである。

東側で知り合いになった人々、カレル大学のチェスラフ、プラハのヤルダとおじさん。ドレスデンのマルコ・ステファン博士、彼らには帰国後、手紙を書いたし、チェスラフには、彼の希望通り日本の女の子を紹介したが、返事も何もなかった。私は、手紙を出すことが、彼らにひどい迷惑をかけることになるようないけないことだったのだろうかと後悔した。非常に悔やまれた。しかし、その年の11月から12月にかけて予想もしないことが起きた。崩れることなど思いもよらなかった、社会主義が崩壊し、その象徴のベルリンの壁が崩れた。チェコ、ハンガリー、ポーランド、東ドイツと堰を切ったように自由化の波が巻き起こった。

私は、この大きな出来事を固唾をのんで見守っていたが、そうこうした年の暮れ、マルコ・ステファン博士からは”返事を書けずに申し訳なかったが、ついに壁が崩れ、我々も自由になった”という喜びの手紙に、子供の写真が添えられ送られてきたし、チェスラフからはやはり紹介した女の子のもとに、やはり喜びの手紙が届いたとのことであった。

私は、この全世界をゆるがす、激動の波を肌で感じ取ることができたかと思うと

この幸運を神に感謝したくなった。



(ドレスデン市、マルコ・ステファン博士からの手紙)

## 旅慣れた頃 (デンマーク、西ドイツ、スイス)

東側諸国の重苦しい旅のあとのせい、これからの西側諸国の旅はなんとなくお気楽に感じられる。心身ともに身軽になってまずはコペンハーゲン駅の構内にあるインターレイルセンターで一休み。ここでまた宿を確保する。デンマークは物価が高いと聞いていたので、贅沢はできない。安い宿といったら YMCA を勧めてくれた。

ここで無料の立派な市街地図をもらい、YMCA の場所を地図に記してもらいそこに向かった。コペンハーゲンの駅前、世界的に有名な遊園地のチボリ公園。YMCA に向かい、市庁舎広場からユンゲンス・ニュートウ広場に至るストロイエという繁華街を歩く。これは 1.2 km に及ぶ歩行者天国である。まだ朝早いので、店はしまっている。

信号待ちのときに、そこにいた旅行者らしい女の子に話しかけたが、彼女はオーストラリアから来て、これから YWCA に行くところだ、とのことだった。町は、霧雨が降り、なんとなく寒々としている。日本では、初冬の曇り気である。さすがに緯度が高いせいもある。ちなみに 7 月は、デンマークでは一年間でもっとも暑いときであるとの事だが、最高気温は 22 度だそう。

そうこうしているうちに St.Kannikestraede19 の YMCA についた。早速、宿の受付をする。このときも、ドイツ語圏での旅行が長かったため、最初にドイツ語を使い、しかも申込書にコ

ペンハーゲンの前の最終滞在地を書く欄があり、これにベルリンと書いたら、ベルリンに住んでいるのですかね？と聞かれた。値段は安かったが、ベッドナンバーを聞いて、そこに行くと、体育館のようなところにベッドが100個程度おいてあり、まるで雑魚寝のようなものだった。がっかりしたが、まあ仕方ないことだとあきらめ、荷物をおいて散策に行くことにした。幸い雨は上がっている。

近くの駅から真っ赤な国電で、数駅先のヘルシンボーまで行って引き返す。婦人に話しかけられる。カメラバッグの名前をみて不思議そうな顔をしている。町は寒々として、まさに北欧の町の印象である。海沿いの北側エステルポート駅から歩いて散策をする。ときおり天気雨になる。形が五稜郭に似ているカステレット旧城の周りを歩いて人魚の像へ行って見た。これは、よく言われることだが思ったよりちっぽけとしていてなあーんだという感じである。周囲はコペンハーゲン港で、大きな客船も停泊している。バルト海の連絡フェリーなのであろう。また、コペンハーゲンはジャズの町として有名だが、たしかに運河沿いのニューハウン（新しい港を意味する、船乗りのたまり場）には、サクソスや楽器片手の大道芸人がたくさんいたし、ジャズの演奏があちこちから聞こえてくる。

アマリエンボー宮殿（デンマーク王室の王宮。毎日正午に衛兵の交替式がある。）の周りを散策して再び市庁舎の方向へ。昼飯はどうしようかと思い、マクドナルドに入ろうとしたら、日本で言う3・8セット（380円）が何と48クローネ（1クローネ25円、つまり1200円相当）と知ってあきらめた。これじゃ、デンマークじゃあまりいい食生活はできそうもないと思った。コペンハーゲン滞在は1泊だけにしよう。中央駅に向かって歩きながら、安そうな店を探したがなかった。しかたなく駅構内のスーパーで、牛乳とパン、ハムを買って、チボリの前のベンチで食べた。ついでに絵葉書に、無事共産圏を抜けて、いまコペンハーゲンにいるとしたため構内の郵便局で出した。

腹がいっぱいになったら眠くなった。そういえば、昨日の列車では、東ドイツ国境越えでもあり興奮して眠れず、ほとんど一睡もしてなかったのだ。一度YMCAに戻り昼寝をした。疲れた身には、ベッドが確保されているだけでもありがたい。しばしの間熟睡してしまった。目が覚めると、もう午後5時くらいになっている。再びニューハウンのほうに行ってみる。一層にぎやかになっている。ライブハウスに立ち寄りたいたのはやまやまだが、値段を考えるとあきらめざるを得なかった。大道芸人のレベルの高い演奏を楽しみながら、そぞろ歩いた。YMCAの近くの、大学の構内と思われる広場では、サクソス奏者5人のクインテッドが演奏を披露していた。めちゃくちゃうまい。

疲れもとれ、雨も上がり気分爽快でストロイエへここでは、家族と思われる芸人がパフォーマンスしていた。夕飯は奮発してマクドナルドに行こう。例の1200円相当のハンバーガーセットを食べたが、やはり日本の380円のものとは変わりなかった。貧乏人にとってはせめてもの贅沢である。市庁舎前広場で、美しい夕暮れを見ながらYMCAに戻った。

一人の日本人に話しかけられた。彼は、私が預けていたカメラに興味を持ったらしい。“それはニコンですか？”彼はニューヨークで写真の勉強をするために、資金稼ぎのためにアルバイト

をしているとのことだった。コペンハーゲンには物価が高い分、バイト代も高いのだと、しかもアルバイトはこの国の非常に高い税金をまったく払う必要がないので、ヨーロッパでは人気の場所なのだを教えてくれた。かれは、カメラのレンズに非常に造詣が深く、ライカやコンタックスの話題でもりあがった。私は、ここで始めてカールツアイスの本拠地が、実はイエナという東ドイツの町であることを知った。非常に楽しいひと時を過ごし、お互いの成功を祈りあって別れた。明日は、もう少し物価の安い西ドイツに戻ろう。

7:00 発の、コペンハーゲン発フランクフルト行きのメルクルという EC (ユーロシティ) に乗ることにした。今日からは、ユーレイルパスを使っての一等旅行である。なんとなく気持ちが弾んだ。初めて一等コンパートメントに乗る。しかし、乗ってしばらくして感じたのだが、連れがいないときにはコンパートメントはつらいものだ気がついた。話し相手がないのである。また、物思いにふけりたいたいときも、なんとなく黙って乗っているのは、同室者に気まずい感じがするものだ。これから乗るときには1等のオープン座席の一人がけの席にしようと思った。

駅構内には、モスクワの行き先板が掲げてある客車もある。始発駅だけに、きっちり定刻に出発した。途中の風景は、いかにもデンマークが酪農の国であるかを物語る、のどかなものだった。途中、何度か長大な鉄橋で海を越えて、ロドビーからプットガルテンまでのフェーマルン海峡はスカンディナヴィア・ドイツランドのフェリーで越える。列車がそのまま船に乗る。東ドイツからのフェリーもそうであったが、日本では青函連絡船が洞爺丸台風以来、鉄道の客車航送をやめてからはこのような光景は見られない。フェリーは、まさに西側諸国のもので豪華。バルト海の東ドイツのものとは比べ物にならない。甲板に出てみると、すばらしい青空で約一時間の船旅を楽しんだが、免税店で買い物をする人も多数いた。

対岸の西ドイツ、プットガルテンからは非電化区間を走る。ディーゼル機関車に引かれる。再び曇りがちになってきた。北ドイツの風景は、どこことなく荒涼としていたが、この天候もその気分に影響したものであろう。途中リュベックを通る。

ハンブルグ中央駅着。この町は、ぜひとも訪れてみたい町であった。エルベ河沿いのロッテルダムと並ぶヨーロッパ 1.2 の港、河口まで 110km もある。やはり山育ちのせいかな港町には、なぜか惹かれる。駅で両替する。使い切らなかった硬貨がどんどんたまる。せっかくだから記念にとっておこう。インフォメーションで、いつものごとくまず宿をとり市街地図をもらう。この地図もやはり立派なものだった。地下鉄に乗りレンヂュングスブリュッケ (上陸棧橋駅) 近くのユースホテルに向かう。ユースホテルは **Auf dem Stintfang** という。地下鉄には自転車を持ち込む人もいる。日本とは異なる。駅から小高い丘に登り、港を見下ろすところにそれはあった。受付の際、英語の間違いを後ろに並んだ奴に馬鹿にされ非常に腹が立った。

初めて屈辱を味わった。このときの屈辱は、私のその後の英語習得の熱意高揚に少なからぬ影響を及ぼしている。気を取り直して、市内を散策した。飾り窓にもいった。ザンクトパウリ地区のヘルベルト通りというところだが、通りの入り口には鉄の門があり、レディはお断り(ダーメン・フェルボーテン)と書いてある。飾り窓をみて歩いたが、冷やかしたとわかれると水をかけら

れるようだ。何人かが屋根から水をかけられていた。日本人である私は可能性を期待されていたのか、かけられなかった。相場は100~200マルクとのこと。

そこから、港へ坂道を下っていくと、何とも港町の風情の美しい町であった。ザンクトパウリ上陸栈橋から港湾一周の観光船に乗った。町の中には運河が入り組み、その間を縫うように船が走る。とても河口からずっと離れた港町とは思えなかった。



(ハンブルクの港：今市市在住の藤木さんが描いてくださった。)

疲れてきたので再びユースホテルに戻って一息入れた。どうもさっきの一件があつてから、ユースホテルの中では、みんなに馬鹿にされている気がしてすっきりしない感じではいたのだが、夕飯を食堂で食べていると、日本人に声をかけられた。彼は、慶応大学の出身でこれからアフリカに行く予定だといっていた。いかにも旅なれたサンダル姿で、いさいさか気が滅入っていた私には力強い味方であった。しばらく、楽しくお互いの予定やら話した後、二人でまたセックス地区にいてみることにした。ザンクトパウリ地区、さらにその近くの **Reeperbahn** (レーパーバーン) という大通り。飾り窓にもまた行った。

レーパーバーンでは日本語の客引きもいる。お兄さんオ○○どう？てな感じ。私がデンマーククローネ硬貨を持っているのがわかる と、それを非常に欲しがった。譲ってくれと引きさがる。そうなる余計あげたくなくなって、体よく断った。結局 2 人とも所詮、貧乏なバックパッカーであり、散々ひやかしかけて港にもどった。



(ハンブルクの港にて)

栈橋近くのバーに入ると人目でアル中とわかる女たちが飲んでいて、軽く言葉をかわし乾杯。その後は、このだ大海君と、しばしビールを飲んで楽しく過ごした。帰りにお金を払おうとしたら、どうもアル中女たちのおごりらしい。お礼を言って栈橋に行った。大海君は、今日の夜行で南下するらしいので、出発時間の間近まで付き合うことにした。栈橋で、お互いの写真を撮ったりして過ごした。楽しいひと時であった。かれはその後、スイス、フランス、モロッコ、エジプト、ギリシャ、トルコと回ったらしい。

7月18日になり、日本を出て2週間も過ぎたせいかさすがに旅慣れてきたのだが、いささかの疲れもたまってきた、大都市ではなく小さな町でゆっくり体を休めたくなった。ここハンブルクのユースで次の目的地を考えていたのだが、ふとガイドブックのなかのリュエデスハイムという地名が目にとまった。ライン河畔のちいさなワインの町。ローレライも近い。宿も安くてよさそうなものがある。よし、決めた。今日は、リュエデスハイムまで行って、2泊くらい泊まろう。

ハンブルク発フランクフルト行のECに乗る。一等のオープン一人掛けにした。途中ブレーメン(ハンブルクに次ぐ第二の港として有名だがブレーメンの音楽隊の舞台としてのほうが有名)、ドルトムント、エッセン、デュッセルドルフ、ケルン等の有名な街を過ぎる。ドイツのルール工業地帯である。ケルンでは有名な大聖堂も見える。ホーエンツォレルン橋でライン川を渡る。オーデコロンとはフランス語で”ケルンの水”の意味。ナポレオンの時代に、ケルンにいたフランス兵が、里帰りするときに、妻や恋人にこの”ケルンの水”をもって帰ったの

がそのいわれのような。今でも、香水産業が盛んなようで、4711 ポーチュガルというオーデコロンは有名だ。

連邦政府の首都ボン（ベートーベンの生誕地）を経て、マインツ（活版印刷を発明したグーテンベルグの出身地。）でおりる。このあたりまでくると北ドイツのなんとなく寒々とした雰囲気から、南ドイツの暖かい雰囲気が漂っている。太陽の光も柔らかいである。

ローカル列車に乗ってライン川を渡りヘッセンの州都ビースバーデンへ。更に乗り換えてリュードスハイムに着いた。天気もよく、のどかな川沿いの風情は、故郷の只見川沿いの只見線の風景とも会い通じるものがあり、気持ちがほぐれた。約 30 分ほどでリュードスハイムに着いた。のどかなワインの街。宿は予定通りの Pension Nagler というペンションにした。ほっと一息。

この宿は、ガイドブックに書いてあったとおりの安くてきれいなすばらしいペンションであった。部屋についているバスルームにはなんとバスタブもあるではないか。風呂に入るのは実に久しぶりである。まず、洗濯をして、2 週間、履き通しだった靴を洗った。

そして湯船に湯をはって、入る。至幸のひと時である。旅の疲れが一気に吹っ飛んだ。

靴が乾くまでの間、ゆっくり部屋で過ごす。このあたりも日没は夜の 10 時くらいだから、

ゆっくりしてからでも町の散策はできる。ベッドに寝転がりながら、明日の予定を考えた。

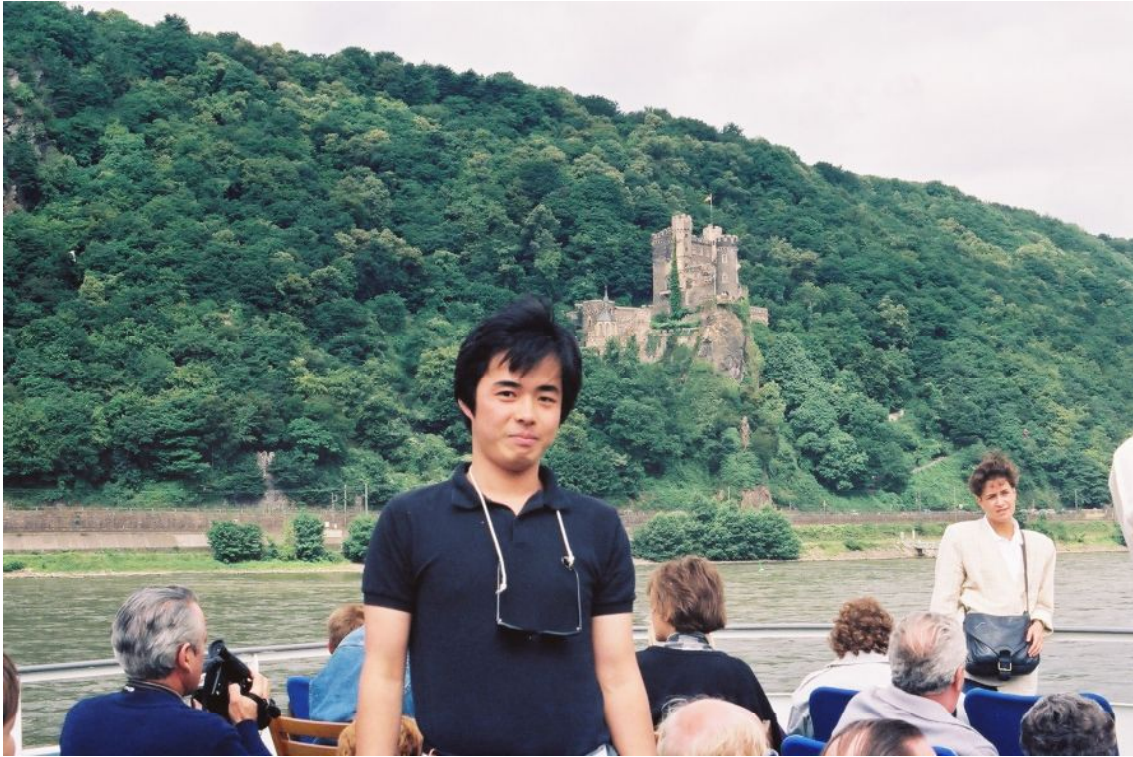
せっかくライン川の畔に来たのだから、ライン下りはしたい。ここリュードスハイムにも乗船桟橋があるし、またうれしいことにユーレールパスが効くのだ。あすは、コブレンツまで下って、町を散策した後、ラインの右岸(左岸のドイツ国鉄の本線と異なり、こちらはローカル線である。)を戻ってこよう。しばしまどろんだ後、靴も半乾きであったが

町に出ることにした。なんとゆったりとした時間。町はブドウの香りが漂っており、ローレライの音楽が流れている。川沿いのレストランで食事。シュティムト・ショーン(つりはいらぬよ。)が決まる。ゆったりとしたラインの流れに、柔らかな日差し。すばらしい町だ。

川沿いの土産物屋には、ヘンケルやらゾーリングゲンやらのナイフやアーミーナイフが並んでおり、食指が動かされたが、日本からすでにアーミーナイフを持ってきており無駄遣いとおもって我慢した。もし持ってこなかったら、いずれ役に立つだろうと買ってしまっただけに違いない。駅でビールを買って(驚くほど安い)ペンションに帰って休んだ。

翌日は、予定通りケルン・デュッセルドルフ汽船会社の観光船に乗る。近代的なきれいな豪華客船だ。ビンゲン、バッハラハ、ザンクトゴア、ボッパルトと小さな港に立ち寄る。川沿いに古城が散在する。ネズミの塔-最も美しいと言われるラインシュタイン城-プファルク城-シェンブルグ城-ローレライ-ネコ城(フォン・カッツェネルンボーゲン伯所有)の城塞:1806年にナポレオンの侵攻で落城1898年に改修)ライン左岸を、ドイツ連邦鉄道の優等列車が通過するのが見える。ルフトハンザドイツ航空が運営するデュッセルドルフ発フランクフルト行の豪華列車も通過する。頭でイメージしていたのと同じ風景。ただローレライは何の変哲もないただの崖であった。





(ライン下りの船上にて)

ローレライ伝説とは：シェーンブルグ城内に美貌の 7 人娘がいた。彼女たちに求婚する男は数多くいたが、娘達は、こうした求婚者達をしばらくの間、場内にひきとめ、思わせぶりな態度をとったあげく追い出すのが常であった。こうした男の中にヴァルターと言う男がいた。豎琴の名手であったかれは、他の男よりも長く場内にとどまることができた。やがてヴァルターは、7 人のうちアーデルグンデという娘の心ありげな振る舞いに、すっかり本気になってしまった。しかし彼もいよいよ結婚と言うときになって捨てられてしまう。心をもてあそばれ、絶望のヴァルターはライン河に身を投じる。ヴァルターは妖精に連れられ水底の宮殿へ。宮殿の女王は、哀れなヴァルターの身の上話に心を痛める。やがて女王は小舟に乗って遊ぶ 7 人娘の前に姿を現す。”自分以外に何者も愛することを知らない情け知らずの姉妹ども。おまえ達の心のように石になっておしまい。”女王が叫ぶと、7 人の姉妹達は岩となってしまった。以来、ローレライと言われるこの岩の周辺は、船の難所になってしまった。岩の上に美女が現れ、これに見とれた船の舵とりが操作を誤ってしまうらしい。

また、この周辺はワーグナーの歌劇”ニーベルングの指輪”で有名なラインの黄金伝説もある。そういえば、今はないが、かつてのドイツの最上級列車の名前は”ラインゴールド”であった。

さまざまな思いをめぐるせながら、優雅に時を過ごしコブレンツまで行った。ここはライン川とモーゼル河の合流点。マルクスブルグ城が見える。町を散策しながら駅に。駅のマクドナルドで昼飯を食べながら、次の目的地を考えた。スイスまでいってしまおうと考えていたが、さてどこにしようか。スイスは物価が高いと聞いていたし、長居はできない。まあ一箇所だけに絞るとしたらと、いろいろ考えていたら次に行こうと思っていた、スペインか

イタリアのいずれにもアクセスがよいジュネーブという案が浮かんだ。ここは国連ヨーロッパ本部もあり、レマン湖のほitoriということも魅力的だ。

コブレンツの駅で翌日のジュネーブへの連絡を教えてもらおうジュネーブと言っても通じない。アイネ・シュタット・イン・シュバイツ（スイスの1都市だ）と言ったらゲンフとドイツ語では言うのだと教えてくれた。明日の目的地も決まってしまうと、気が楽になり、ローカル列車に乗ってラインの右岸をリュエデスハイムに戻った。近くの山の上に記念碑と展望台があり、そこまでロープウェイがあるようなのでいってみた。Niederwald-Denkmat という。

ラインの眺めは、最高。天気もいいし気分がいい。下には、悠久のライン河の流れ。高校時代に英語でローレライのことを習ったときに、思い浮かべたのと同じ風景である。さすがに大河で、貨物船も頻繁に通る。しばし景色に見とれて過ごした後、夕飯を食べて宿に戻った。宿では、女将さんが庭掃除をしておりゲーテン・ターク（こんにちは）と挨拶をかかわす。きれいなペンションで気持ちのいい休日を過ごすことができた。



（丘から望むライン川の雄大な流れ）

翌日は、やはりライン右岸のローカル線にのりコブレンツからベルン行の EC に乗る。途中、マンハイム、カールスルーエ、バーデン・バーデン（北シュバルツバルドの代表都市、ドイツ屈指の温泉保養地）、フライブルク（有名な大学都市、ハイデッカーもここで教授をしていた。またマリー・アントワネットはこの地からフランスに向かった。）を通る。

天気は非常によく、このあたりがシュバルツバルト（黒森）なのだろうと、想像しながら車外の景色を眺める。徐々に、景色が山の風情に変わるとスイスのバーゼルへ。バーゼルにはドイツ駅、スイス-フランス駅がある。バーゼルからスイスの首都ベルンへ。駅は超近代的。

乗り換えてジュネーブ行へ向かう。陽光まばゆい山岳地帯を、真新しいスイスのインターシティが快走する。ローザンヌを過ぎるとレマン湖が見える。このあたりからはフランス語圏で、言葉が違うからなのか、風土が違うからなのかわからないがなんとなく雰囲気異なる。パリまで何キロの道路標識も見えるし、駅の標識や広告も今まで見慣れていたドイツ語ではなくフランス語である。レマン湖を左に眺めながらジュネーブ（コルナパン駅：ガール・ドゥ・コルナパン）に到着する。

まずスイスフランに両替してホテルを探すが、安宿はない。手当たり次第に、電話ボックスからホテルに電話するがこちらの要求を満たすものはない。挙句のはてに、ジュネーブにはそんなホテルはないよといわれた。さてどうしたものかと地球の歩き方を眺めていると、近くにニヨン（かなり古い歴史を持つという）町があり、そこに安くていいホテルがあるとかいてある。とにかくそこに行ってみよう。ローカル列車に乗ってニヨンに向かう途中、最初満員だったが 2 駅目ぐらい皆降りてしまい。わたしのボックスには若い美しい女性と私だけになってしまった。お互いだまっているのも何だか気まずいので、“ニヨンまでどのくらいかかるでしょう？”と聞いてみた。

（ニヨンにて、レマン湖、モンブラン方向を望む）



するとかばんの中から、ポケット時刻表（日本でも新幹線の簡単な時刻表があるが、そのようなもの）を出して調べてくれた挙句、それを私にくれるという。ありがたく頂戴した。これは、その後も非常に重宝した。彼女が“国籍はどちらなの？”と聞くので、“日本だよ”と答えるとなぜか喜んでくれた。彼女はポーランド国籍でジュネーブ大学に留学中らしい。むかしから、ロシアに勝った唯一の国は日本だけだとしてポーランド、フィンランド、トルコなどでは親日感情が高いと聞くがやはりそうなのだろうか。しばし、ショパンの話などをして盛り上がった。ニヨ

ンの手前の駅で彼女は降りていった。ボン・ボワイヤー・ジュ！オ・ルボワー（よいご旅行を、さようなら）とさすがにフランス語のお別れであった。何と気持ちのいいこと。まわりの景色まですばらしく思えてきた。ニヨンのホテルは **Relais du Mont-Blanc** といい一泊 35 フラン（3500 円相当）。これもまた予想以上にすばらしいホテルであった。最高に良かった。レマン湖のほとりに行く。モンブランが見えた。きれいな夕暮れ時のレマン湖。湖をわたる風も気持ちがいい。

翌日は、このホテルもよかったがジュネーブの町にもかなり惹かれるので、ジュネーブのユースホステルに泊まることにした。ジュネーブは、人口 17 万人の半数以上が外国人という国際都市。国連ヨーロッパ本部や、多数の国際機関が存在する。またジャン・ジャック・ルソーの生誕地でもある。

朝食を済ますとまたローカル列車でジュネーブに。途中の駅の広告もフランス語でおしゃれ。モンブラン通りの赤いバスを改造した案内所に行ってみる。ユースホステルの場所を聞き、また例のごとく市外地図をもらいユースホステルに。さすが上品な町のものだけあってきれいである。受付のときにぎやかな女の子集団がいて、彼女たちのパスポートを見せてもらったら、オーギーギャルでみんな写真がいろいろなポーズでとられていて、われわれの固い表情の写真と異なり、非常に明るく開放的な印象であった。また、そういえば香港からの旅行者が結構めだち、彼らはとにかくよくしゃべるという印象であった。

市外観光はあとでもゆっくりできるので、荷物を預け、再び列車に乗りモントルー・ジャズフェスティバルで有名な、そして保養地として名高く有名人の別荘も多いモントルーへ、そしてそのそばのシヨン城（バイロンの詩で有名：シヨンの囚人。宗教改革者フランソワ・ド・ボニヴァルが地下牢につながれていた）に行ってみる。モントルーはフルトベングラーも晩年をここで過ごした町らしい。確かに高級なリゾートのようだ。シヨン城はちっぽけな城で絵になる風景ではあるが、なんということはない。シヨン城からレマン湖沿いにモントルー駅まで 2 キロくらい歩く。途中老齢の外国人夫妻に話しかけられ、しばらくお付き合いをして話をしてしたが、あまりに歩調がゆっくりなのでどうしたものかと思っていたら、向こうからお先にどうぞ。楽しかったよ、ありがとうといってくれた。再びインターシティに乗りジュネーブに戻る。

ジュネーブ駅の別なホームにはミラノ中央駅行のジザルピーノが停車しており次の目的地をミラノにするかどうか迷う。確かにモードの発信地というミラノの町も捨てがたい。まあ今日の夜、ゆっくり考えるとして街をぶらつこう。やはり、予想通り物価は高い。ラーメンが無性に食べたくなり探したが日本円にして 1400 円程度。食べるのをやめた。マクドナルドのセットが 720 円相当。それで我慢我慢。ちなみにパリでは 280 円位だった。

トイレに行きたくなったので、通りがかりの人にフランス語で聞いてみた。“エスキリヤ・ユヌ・トワレ・アコテディシ？”（近くにトイレはありますか？）果たしてフランス語で答えが返ってきたが、どうも“ジュネーブには公衆便所がないので駅に行きなさい”。とっているようで、“ガール”（駅）という単語だけは、明瞭に聞き取れた。ジュネーブの市民レベルは、非常に高いと聞いていたが、親切だし確かにそのようだ。“メルシー・ボーケー”（ありがとう）といっ

て別れる。

(下：レマン湖とシオン城)



散策途中、身なりのいいインドネシア人と仲良くなり話が弾んだ。彼に、日本では首相が女性問題で引退したことを教えて貰った。後で、マドリッドで日本の新聞や、雑誌を見る機会があった。時の宇野首相が女性スキャンダルで引退したのであった。彼にどこに泊まるのかと聞いたら、ホテル・プレジデント（高級ホテルである）と答えが返ってきてあえて聞かなかったが、身なりから言っても政府の要人だったのかもしれない。ユースホステルに戻るといい加減疲れてきたので、自分のベッド（二段ベッドの上段、下の段は北アフリカ系の黒人の人だった。）に横たわり次の行き先を考えた。当初の予定通りスペインにするか、いやイタリアにするか。話によると、どうもスペインは治安があまりよくなさそうだ。しかし、本場でフラメンコギターの調べを聞くのが目的であった。散々悩んだが、スペインに行くことにし、最初の訪問地はバルセロナにした。そうと決まると、急に眠くなり寝てしまった。

スイス最後の日、まずはジュネーブ駅に行ってポート・ボウ（スペインの国境の駅）行きの寝台列車のチケットを取る。2等はすでに売り切れており、1等しかなかった。まあ、それでもそんなに高くはないし、まずは安心とコインロッカーに荷物を預けて、ジュネーブ市内散策をした。まず駅の裏手の国連ヨーロッパ本部（パレ・デ・ナシオン）に行く、せっかくなのだから英語のツアーガイドのコースに入った。かつての国際連盟本部、いまの国際連合ヨーロッパ本部である。本会議場など、いろいろ案内してもらった。

そのあとは宗教改革者カルヴァンが説教を行ったサンピエール聖堂に登る。高台の上にある塔なので見晴らしがよい。そこからは右手にフランス領の山々、左手にジュラ山脈、間にレマン湖、

袂にジュネーブの街、140mの大噴水も見える。そこから英国公園にくだり、ローヌ河の流出口、ローヌ通りの時計の店。ジュネーブ大学。宗教改革記念碑を見る。ジュネーブにも市電があった。それでも列車の発車は夜遅くなので（とはいっても、10時くらいまでは明るいのである。）更にローザンヌに足をのばす。通いなれたルートをインターシティでローザンヌへ。  
（下：坂の多い、ローザンヌの町並み）



ローザンヌは国際オリンピック委員会の本部があり、また世界各国の金持ちの別荘が集まる観光保養地で教育分化の中心都市である。駅を降りて坂道を上るとカテドラル、スイスで最も美しい教会と言われるが、入ってみると 聖歌隊が歌を歌っていて、いい雰囲気。優雅な町である。ローザンヌで夕飯を食べていよいよジュネーブの駅に。ローザンヌの駅にオリエント急行(V.S.O.E Venice Simplon Orient Express)が停車していた。先にも書いたがローザンヌからジュネーブにかけてはP a r i sまで何キロという標識も多くまさにフランス語文化圏であることを実感する。ジュネーブの駅で、コインロッカーの荷物をとりホームに向かう。列車はこの7番線から発車する。ここはフランスへの優等列車が発車するが、すぐにフランス国境なのでホームに入る前に出入国手続きがある。7番線はほとんどフランスの雰囲気。TGVも発着する。

ポート・ボウ行の夜行急行 21:31 分発 HISPANIA EXPRESS。一等クシェッタは上下2段ベッドで日本のB寝台のよう。同室は、ドイツのハノーバーからスペインに帰る父親と20歳の娘さん2人の3人連れ。長話はせずに good night を言って眠った。うとうとしていると列車は出発、これからローヌ川の流れに沿って山を下り、リヨンなどを深夜に通過し、明日朝 5:47 にはスペイン国境を越え、ポート・ボウにつくはずである。いよいよ情熱の国スペインの旅が始まるのである。

## 情熱のスペイン

途中はまったく覚えてない。ふと目が覚めたら、何となくがさがさしている気がしたら私の下に寝ていたおじさんが“ポート・ボー”といて起こしてくれた。まだ、夜である。そうこうしているうちにガタゴトとスペインの国境駅のホームに列車が滑り込んだ。

ヨーロッパの鉄道の軌間は1435mmの標準軌だがスペインは1620mmの広軌である。通常の列車は直通できないので、この駅で乗り換えになる。ヨーロッパ標準軌がこの駅まで引かれている。この不便さを解決したのが、スペインのタルゴ列車で、短い連接車体の列車が自動的に軌間変更を可能にしたものでジュネーブ-バルセロナ、マドリッド-パリ間などに直通列車が走っている。

隣のホームには列車が止まっていて、電気もついていないのに降りた乗客がいつせいにこの列車内に向かって走り出した。これがこれから乗る予定の7:15発のバルセロナ行きなのかと私もつられて乗り込んだが、すでにコンパートメントはみな一杯になってしまった。やられたと思って見ていたら、日本人2人が乗り込んでいるところがあり、あいてるかと思えば聞いたらどうぞとの事でたすかった。私が入り込み、6人がけのコンパートメントは私たち日本人三人と、スペイン人？3人で一杯に。その後は、通路まで人があふれた。とりあえず、席を確保したので安心し、売店にスペインの時刻表を買いに行った。スペイン語で時刻表を何というのかわからなかったので”Time table”といたら”Holario?オラリオ”と帰ってきた。わからないので”Si”（はい）と答えたら時刻表がきた。（本当は、このわからないのに、はいととりあえず答えてしまうのは、日本人のメンタリティとしては良くないとは世界的に評価されることではあるが）。コンパートメントに戻り、日本人の2人と自己紹介しあった。

同年代の女性と男性だったので、てっきりアベックのバックパッカーかと思っていたら全然別で、女性（Aさんということにする。）はイタリアからコートダジュールを経て一人旅をしているつわもので、しきりに地中海のすばらしさを話していた。これから、ポルトガルに向かいユーラシア大陸最西端の岬まで行くとのことだった。男性のほうは（今後N君というが）、シェフの卵で大阪の辻料理学校からリヨンに長期修行に来ているらしいが、夏季は滞在している寮が、旅行者のために解放されるので一ヶ月間そこを空けなければならないとのことで、ぶらり旅に出てきているそうだ。お互いに、いままで見てきたところや、今後の予定を話したりして情報を交換し合った。スペインの今までとははるかに異なる景観のもとをひた走り、9:59 スペインの列車にしては珍しく定刻にバルセロナ、サンツ駅に到着した。本来は、海辺のテルミニ駅が終着となるところだが、現在、バルセロナオリンピックに向けてかどうか知らないが工事中とのことで、しばらくはここがバルセロナの中心駅になるようだ。

いままでは駅の構内放送はあまり聴かれなかったが、サンツ駅ではスペイン語独特の構内放送が頻繁に流れていた。Aさん、Nとともに両替を済ませた後、互いのこれからの旅の成功を祈りあって別れた。とりあえずの地理的知識はテルミニ駅周辺の情報しかなかったの

で、インフォメーションでその近くの宿を取ってもらい、また例のごとく地図をもらったが、これはエル・コルテ・イングレスというデパートが作っているものでとてもきれいで良くできたものだった。マドリッドでも同じような地図があった。

バルセロナは人口 164 万人の、カタルーニャ地方の中心都市。1992 年オリンピックが開催された。またアントニオ・ガウディの建造物で有名である。地下鉄でテルミニ駅に向かうが、スペインではすりや置き引きに注意と聞いていたので、今まで以上に意識して乗った。しかし、結局、まったく安全で快適であった。

テルミニ駅の近くに行き、宿を確保した。Hostal Residencia La Hipica というものでとりあえず 2 泊の予定とした。食事は、宿の前のレストランが良いと勧められたので、そこで食べる。サングリア 5 人分ひとりで飲んでしまい、したたかに酔ってしまった。料理も安く美味しい。宿でひとねしたら二日酔い。がんがんとする頭で、シウタデーリャ公園へ。徐々に酔いから醒めつつあるのでバルセロナ港に行き、港内遊覧船にのった。コロンブス記念碑がありここから伸びる通りがバルセロナ 1 の繁華街ランブラス大通りである。

明るく開放的な港町。実家にまた絵葉書をしたためた。夕飯は宿の近くの店で食べた。鶏のオープン Pollo Asado にした。再びサングリアを、今度は一人分だけ飲んだ。食後にアイスコーヒーを頼んだらびっくりした。レギュラーコーヒーがコーヒーカップに入ってきて、さらに氷入りのグラスを持ってきてくれた。なるほど、グラスにコーヒーを入れるのか。確かにスペイン語でアイスコーヒーを“カフェ・コン・イエロ（氷つきのコーヒー）”というが、確かにその通りである。それにしても、なんと明るいバルセロナの陽光であろうか。通りを日本の真新しい真っ赤なセリカが走っていく。また、ホンダのバイクが目立つ。また、先ほど両替をして気がついたが、公共の建物や銀行などの中には、必ず自動小銃を持った警官が警備していたのには驚いた。迎え酒の、ほろ酔いで心地よくなり再び港を散策してオスタルに戻る。シャワーを浴びにいったら、何にもないところに紐を引っ張ると上からシャワーの水が出てくるだけの簡単な作り、しかもお湯でない。まあ、まわりも暑いことだし、これがスペインなんだと納得し、その日はゆっくり休んだ。

翌 7 月 24 日、成田を出てから 3 週間になる。さすがにもう旅も慣れた。今日は町をぶらつこう。まずカタルーニャ広場のエル・コルテ・イングレスというデパートでサンダルを買った。とても今までの靴ではむれて仕方がない。このデパートは、主要都市に行けば、必ずあるし、きれいで便利で、スペイン旅行中は何かと世話になる。広場で休んでいたら偶然、ポート・ボウからの列車で一緒になった、リヨンでフランス料理の修行中の N 君と会った。近くのレストランで食事。彼が勧めてくれたデザートがおいしかった。また、隣の席に、家族で食べに来ているスペイン人の一家があったが、その小さい女の子がかわいいこと。まるで人形のようにかわいい。

ついでモンジェイクの丘に行った。フニクラで上に登る。ここはオリンピックのメインスタジアムになるようで、あちこちで工事中だった。ふと売店で、なにやら騒いでいる二人の日本人がいる。どうやら、何かを買ってまけろと値切っているらしい。時折、関西弁が飛び出す。そして



ら驚いたことに、N 君が彼らに話しかける。“おおしばらくやなー。偶然やナー”。なんと彼の同僚だった。同じく、リヨンで料理の修行中らしい。漫才のような話をしてっただと、タクシーをつかまえて嵐のように行ってしまった。颯爽とし、すがすがしい関西人。たのもしい限りであった。

モンジェイクの丘からは、紺碧の地中海、またバルセロナの町並みが見下ろせる。しかも陽光まばゆいまさにスペインの町。(しかし、まだバルセロナはヨーロッパ的であり、これからスペインの奥地に行くに従って、その真髄に触れることになる。) カタルーニャ広場からポプラ並木のランブラス大通りを少し歩く。大道芸人もいるが、ラテンの音楽や、インディオの音楽であり、これもまた今までと異なる。 (モンジェイクの丘にて、バルセロナ港を望む)



夜は、私の宿の近くのレストランで一緒に食べた。彼がいろいろ教えてくれた。ガスパチョがおいしかった。彼に言わせると一級のガスパチョだと。しかも飲んで食べてでも安い。スペインにきてからは食生活にはずっと満足している。バルセロナも気に入ってしまい、もう一泊増やすことにした。そして、スペインでは優等列車に乗るには座席指定が必要だと聞いたので、ここで今後のある程度の予定を立ててしまおうと思った。ホテルで、時刻表を片手に作戦だ。あさって7月26日にはマドリッドに行こう。そこで3泊して、次の7月29日にはコルドバへ、そこで一泊、7月30日にグラナダへ、ここではフラメンコを見る大事な目的があるので2泊、その後8月1日にはセビーリアへ、ここでも有名なフラメンコを見て2泊、8月3日に再びマドリッドに戻ろう。



(バルセロナ：リトラール通りにて)

翌日は切符の手配から始めた。窓口には長蛇の列。やっと順番になって、窓口へ。口でうまく伝わるかわからないので、あらかじめ列車名と時刻を紙に書いて渡した。すると、番号札を渡してくれたがこれが500番台。番号が表示されたら受け取り場で切符を受けとってくれとのこと。しばらく番号を見ていたが、まだ100番台で、しかも一向に進まない。待っているときに、スペインの子供が俺にむかって“オラ、オラ”と盛んに言ってくる。なんか文句でもつけているのかと思ったら、よく考えたら、スペイン語で”Hola”（こんにちは）のことだった。番号の進み方を見ていると、どうもこれから2時間はかかりそうだ。待っていても仕方がないのでサグラダファミリアに行くことにした。そしたらなんと、ここでまたN君とあった。偶然を喜びあった。

アントニオ・ガウディの偉大な未完成の建造物をみた。正式名称はサグラダ・ファミリア贖罪聖堂というそうだ。完成まではまだ何年かかるかわからない。確かに、上のほうは工事中である。日本人も工事に関係しているらしい。そこで昼飯まで食べて、そろそろ切符が受け取れる頃かと、N君にもつきあってもらってサンツ駅に戻る。すばらしい、私の番号がまさに表示される直前であった。ほんの少し待つだけで切符を得ることができた。それにしても、こんなに時間がかかるとは思わなかった。スペイン国鉄 RENFE は結構儲けているのかな。共産圏の切符売り場も長蛇の列で、しかも切符がもらえるまでさらに時間がかかるのだが、もともと列車の本数自体が少ない。それに対して RENFE は結構な本数が走っており、バカンス客などで混雑するのであろう。次にどこに行こうかと話し合い、グエル公園に行こうということになり地下鉄に乗りそこに向かった。ここは小高い丘の上にあり、もともと世紀末の英国で提唱された田園都市構想をま

ねて、グエル氏が開発しようとした分譲住宅地である。分譲計画では60戸であったが、実際に完成したのは2戸だけで、その跡地を公園としてバルセロナ市が管理しているものである。この製作にあたったのもアントニオ・ガウディである。いかにもガウディらしい色彩、形にあふれた公園。中には、晩年ガウディが住んでいた建物がガウディ博物館となっていた。バルセロナにはほかにもガウディによる建造物があふれている。Lesseps という駅から今度は Diagonal という駅まで行って、ミラ邸（ラ・ペドロラ）を見ながら、パセチ・デ・グラシア（グラシア通り）というバルセロナの高級ブティック街を歩く。ここで食事をして、お互いの前途を祝して別れた。N君は、もともと仙台の出身らしい。仙台にお互いの連絡先を教えあい、彼は、日本に帰ってレストランを開いたら、ぜひ来てねとのことだった。さて、あたりはすっかり暗くなった。

地下鉄で宿に戻る。地下鉄も、この時間になると乗客も少なく、パセチ・デ・グラシアからバルセロナータまでの間はちょっとばかり緊張した。宿に帰ると、もうすでに切符も手に入れてあり列車の予定も全て決まったので、なんとなく安心であり、これから訪れるスペインの町々に思いを寄せた。出だしのバルセロナはとてもよかった。ガスパチョの何とも言えない、さわやかなおいしさも忘れられない。

今日はいよいよマドリッドに向かう。大都市のようだがいったいどんな町だろうか。期待が膨らむ。サンツ駅に向かい、まずは朝食をとり列車の中で食べる物やミネラルウォーターを買い込む。ミネラルウォーターには炭酸無しと、炭酸入りがあり、それぞれ“アグア・シン・ガス”と“アグア・コン・ガス”という私は、今回は“アグア・コン・ガス”の小さいほう（ペケーニョ）にした。“アグア・コン・ガス、ペケーニョ。ポル・ファボール。”果たして、3ヶ月の突貫工事で覚えたスペイン語が通じた。列車が入線してきて乗り込む。これは急行であるが、中はきれいだしリクライニングシートだ。これなら、快適な旅ができそうだ。バルセロナ 8:30 発、タラゴナ 9:37、サラゴザ 12:46、グアダラハラ 16:11、マドリッド 17:00 の予定である。予定でも8時間半の長旅であるが、ここはスペイン一時間程度は遅れるだろうなどと、たかをくくっていたが、後に考えが甘いことを思い知らされる。発車間際には、満席になってしまった。

日本のように発車のアナウンスがあり、マドリッドに向けて走り出した。市街地を抜けると、しばらく地中海沿岸を走る。やがて内陸に入ると、いかにもスペインらしい風景になってきた。赤茶けた荒野に灌木が入りまじる乾いた風景。しばらくすると、なんだかわからないが乗客にお辞儀をしてお金を恵んでもらってる、赤ちゃんを抱いた母親が回ってきた。周りの人も、お金をあげているので、私もなんだかわからないが100ペセタほど渡した。スペインの列車では、時々、このような風景に出くわすことになる。ジプシーなのか。タラゴナまでは順調に走る。しかしそこからである。分水嶺のような山中に列車が止まると、それっきり動かなくなってしまった。まわりはやはり赤茶けた大地に灌木。太陽の光がまぶしい。そばに、小さな川が流れている。サボテンこそ無いが、アメリカの西部劇に出てくるような風景だ。

何か、スペイン語で放送があったが、私にはさっぱりわからない。この列車は、いわゆるロー

カル列車の類になるのか、英語での放送などない。周りのスペイン人が騒ぎ出した。ブーイングの声も聞こえる。なんだかえらく遅れそうな気配である。周りの騒ぎように、暴動でも起きそうな気配を感じ取って一瞬、身の危険を感じたのだが、そのうち周りのスペイン人たちはウノを始めたり、歌いだしたりで、宴会のようになってきた。さすが、ラテン人種だ。後ろの席のグループがウノに興じていたので、私はそれを聞いていてスペイン語の数字の復習をすることができた。“ウノ、ドス、トレス、クアトロ、シンコ……”。

一時間も停まっていたらどうか、そしたら側線を後から発車したはずのマドリッド行きのカタラン・タルゴが通過していった。なんで、先に行くんだ。とすれば、事故ではないようだ。いくら優等列車を優先するにしても、ちょっとばかりひどいんじゃないかい。

二時間くらいしてようやく発車した。ちょっと金をかけてもタルゴにすればよかった。周りは相変わらずの宴会状態。列車は、それでも途中で止まってはしばらく休むという状態で、サラゴザ到着の時点で3時間程度も遅れている。ううむ、スペインの鉄道恐るべし。その後も何度か、途中で止まりながらも何とかグアダラハラへ、もうマドリッドは近い。なんとなく都市近郊の趣があるが、すぐにまた荒野が広がる。外はだんだん夕暮れ時に近づいてきた。列車は、ようやく急行列車の面目躍如といった感じで飛ばしに飛ばす。

やがて忽然と、夕闇の中に大都市が現れた。マドリッドである。人口 350 万人。スペインの首都。マドリッドの標高は 646 メートル（ヨーロッパで最も高所にある首都）、マドリッドの水道水はうまいと評判であることは（水道水が安心して飲めるの首都はここぐらい。またグラナダの水もうまいと聞いていた。）ウイーンで話した人に聞いていた。空港のようなチャマルティン駅に着いたのは 4 時間おくれであった。列車から降りるときに、村田君と知り合う。彼はサラゴザから乗り込んだとのこと。せっかくだから同じ宿に泊まろうと、

i で宿をとる。ここでも無料の地図をもらうが、あまりいいものではない。後日、やっぱりエル・コルテ・イングレスでもらったのが、バルセロナのものと同様にきれいでよかった。宿は、地下鉄でまず“S o 1”（太陽）という名の、それこそ有名な“プエルタ・デル・ソル”（太陽門）のある、マドリッドの中心まで行って、しばらく歩いたカレ・ド・サンジェロニモの奥にあった。名前は *Hostal Residencia Antoxo*。きれいだし、宿の主人もいい人のようだ。アルゼンチンからの観光客（夫婦）がいたので、“ずいぶん遠くからきましたね。”といたら、私たちが日本人だと知ると“あなた方のほうが、遠いじゃないですか。”といわれた。確かに、アルゼンチンは日本からは遠いが、スペインからは日本よりはるかに近いのだ。スペインは、南米の人にしてみれば言語が一緒なので旅行しやすいのかもしれない。外はすごく暑かった気がしたが、屋内は涼しい。空気が乾燥してるからであろう。日本のようにむしむししない。水道水も確かにおいしい。村田君と連れ立って、夜の街に出た。プエルタ・デル・ソルの近くの中華料理屋で食べた。

翌日は、村田君ともお互い自分で見たいところがあるだろうし別々に行動しようということになった。彼は、翌日にはマラガのほうに向かって出発するらしい。まずは、有名なプラド美術館に行こうか。外は非常に暑い、乾燥しているせいあまり汗をかかない。

宿のそばに国会議事堂があるというが、発見できない。あまり目立たないのだ。大きなとおりをシベールス広場を経て、プラド美術館に向かう。周りの暑さにもかかわらず、木陰は涼しくしのぎやすい。プラド美術館では、ベラスケスなどの有名な絵を見たが、あまり感激はしなかった。しかし、別館でゲルニカを見ようと思ったら驚いた。警備が異様に厳重なのである。金属探知機の中を通らなければならない。通ってからしまったと思った。カメラバックをもったまま通ってしまったのではないか。今まで、東ヨーロッパ諸国などで撮ったフィルムがシールドにいれずに入れてあった。もしかして感光したかも。まあ、仕方がない。あとで、現像してみよう。このような思いまでしてたどり着いたゲルニカはやはり違っていた。どこか、異様な雰囲気である。そのうち、また見にきたいと思う。そうこうするうちに、昼の時間となり、ガイドブックにもあったプラド美術館のパエリアを食べたが、これは若干の期待はずれであった。

昼食後は、プラド美術館のあるレティーロ公園を経て、プエルタ・デル・ソルに向かった。ここに大きな温度計があるのだが、表示はなんと 45℃。しかし、日本で感じる夏よりも過ごしやすい。やはり乾燥していてじめじめしないためであろう。おお！やはりこの一等地にはエル・コルテ・イングレスがある。スペインでの老舗、銀座の三越のようなものであろう。この中に、写真のラボがあり、やはり 1 時間仕上げとのことだったので、フィルム全ての現像を依頼する。そこから、カレ・プレシアードスという有名な通りを経てマドリッドの銀座（なんと日本人ぽい命名であろうか）とガイドブックに書いてあるグラン・ビアに向かう。革製品で有名なロエペの店などがある。また、1 時間仕上げの写真のラボもたくさんあり、みな日本にあるのと同じ、緑の富士カラーの看板であったのには驚いた。どの店にも、“写るんです”が置いてある。このフィルム一体型の使い捨てカメラは西ヨーロッパを席捲してしまっているようだ。日本人としてちょっとばかり誇りに思う。

ぶらぶらした後、エル・コルテ・イングレスに戻り、無料のきれいな市街地図をもらい写真屋にいくといきなり謝られた。どうやら、写真の一本がうまく現像できなかったらしい。この分の現像代はいらないといっているようだ。仕方が無いので、勘弁してやった。スペイン語で苦情を言うほど上達してないし、英語ですらうまく文句を言える自信がない。どうせだめなものは文句を言っても仕方が無い。しかし、どのフィルムをだめにしたのか確認してみてもがっかりした。プラハから、ベルリン、コペンハーゲンにかけて撮影した、私にとっては得がたい一番大事な一本であった。非常にながかりしたが仕方が無い。歩き疲れたし、昼寝（シエスタ）でもするか。

地下の食品売り場（日本と構造が似ている。）でスイカを買って、宿に帰る。乾燥した真夏のマドリッドを歩いた後の宿の涼しさは格別であった。しかも冷房など入っていない。ここで食べる冷えたスイカのおいしさも格別であった。しかし、このシエスタの習慣はスペインでは一般的で、みな仕事をしていてもお昼には家に帰り、食事をして昼寝をし 4 時くらいからまた仕事を始めて、7 時か 8 時ころ帰宅するようだ。確かに、午後 2 時頃の一番暑い時間に仕事をするのは非生産的であり、なかなかよく考えたものだと思う。現代では冷房も発達しているだろうし、屋内は涼しいのだが、むかしから習慣化したのであろう。これはアムステルダムに行くとき、もっとその有難みがわかる。かの地では、湿度もあり

蒸し暑さが半端じゃなく、とても2時、3時には動く気がなくなってしまうのである。

しかし昼寝というのも気持ちのいいものである。日本に戻ってからもしばらく昼寝の習慣が抜けずに、大学の午後の講義をサボることが多くなったのも困りものではあったが。

すっきりと目が覚めて、夕方再び散策に出た。ソルに行ってみると気温は43℃。今まで経験したことの無い気温が続く。今度は、マヨール広場に行ってみる。ジプシーの子供が、金をねだりにやってくる。これは無視して、散策。ナイフをぶらぶらしている、アブなきそうなアンちゃんがいたので、これは避けて通った。今日の夕飯は、また食品売り場で、なにか買って行って、快適な宿で食べよう。周りが暗くなってきた。ソルの気温計はいまだに40℃。まだまだ体温より高い。宿に戻り、食事をし、マドリッドもなかなかいいところじゃないかと思って床に入る。明日は、アランフェスを通して、トレドに行ってみようなど考えながらまどろんでいたら、宿のすぐしたの通りから悲鳴が聞こえる。何事だと思って、耳を澄ますと、“ポリース”という男の鳴き声。更にドスの聞いた“ポリース、ダズントカム”の声。何と、すぐ下の通りで辻強盗が起こっているのである。こんな、国会議事堂の近くで、安全だとおもっていたのに。更に、逃げる音。追いかける音。なんと私の宿に逃げ込もうとしたようだ。どんどんというドアをたたく音。なんだかやばい雰囲気になってきたぞ。再び悲鳴。宿には入ってこなかったが、私も、ナイフを固く握り締めて、息をのんだ。しばらくして、静かになった。おわれた男はどうなったであろうか。その後、ポリスのサイレンも鳴らなかったので、金を奪われた程度で、怪我や、はたまた殺されたりはしなかったのだろうが、なんとも恐ろしかった。今回の旅行で、もっとも怖かった出来事である。もう一度、部屋のドアの鍵を確認して眠った。

翌日の朝も、昨日の一件が気になった。なんだかんだいってやはりマドリッドは治安が悪いのだろうか。窓から下のとおりを見るが、流血の後などはない。まあ、自分も隙を見せなければ大丈夫だろうと、気持ちを落ち着かせ今日の予定を考えた。昨日と同じように明るい太陽が照り付けるマドリッドの町並み。しかし、今日は昨日とはちょっと違って見えた。なんとなく心細かった。しかし、恐れていてはこれから先、何もできないぞと自分で自分に言い聞かせ、今日の出発駅のアトーチャ駅に向かって歩いた。

アトーチャ駅は、大きな伽藍のような駅で、しかも人がごった返すような駅で無く静かで落ち着いていた。トレド行きの急行の発車時刻までまだ時間があったので、マドリッドからのパリ行きの切符をとってしまうことにする。早くも、スペインから出ることを考え出したというのも今にしてみれば、よっぽど昨日の事件がこたえたのであろう。セビリアから8月3日に戻ってくることは決めていたので、まあすぐにパリに行かずとも一泊だけしていこう。そのときは、もっと治安のよい地区に泊まろうと思った。そんなこんなで8月4日発の、パリ行きの国際急行“プエルタ・デル・ソル”の2等クシェッタの切符を手に入れる。朝ごはんはなんだか食べる気がしなかった。それでも、トレド行きの急行列車に乗って、窓の景色を見ていたら、気持ちが和んできた。

大都市マドリッドの町並み。しばらくすぎると、砂漠のような荒野になる。しばらく走ると、

途中アランフェスを通る。アランフェスは、王室の離宮があったところである。フェリペ 2 世の時代からフェルナンド 6 世の時代まで、アランフェスには一般の人々は住めなかったばかりか立入禁止であった。駅は静かな、樹木にあふれたオアシスのような風情がある。更に、列車は本線からはずれ砂漠のようなところを走り、アトーチャ駅から 1 時間ほどでトレドに着いた。小さな終着駅である。5 世紀にイベリア半島へ侵入してきた西ゴート族は、西ゴート王国を建国。首都をここトレドに定めた。しかしその栄華も町の中に見られるだけで、政治の世界から忘れ去られたようなこの町は、観光で有名になっている。

駅では、おじさんおばさんの日本人観光客の団体を見かけたが、この人たちは奈良からいらっしやっているようで、パンフレットを見せてもらおうと、奈良市とトレド市が姉妹都市になっており、その友好関係を深めようとの奈良市が主催したツアーであった。なるほど、日本の奈良市と立場や今の状況は酷似しているような気がする。この人たちはバスで町に向かうようだが、私は、町外れのこの駅から乾いた暑い道を灼熱の太陽のもと歩く。途中、タホ川をアサルキエル橋で渡る。町の入り口のビサーグラの門まで、結構距離がある。さて、ここからカセドラルまで逆 S 字型に緩やかに曲がる坂道を登っていくのである。

ここからは、みやげ物の店があふれる。街には細工物の刃物が一杯売ってあった。シガロをくれと寄ってくる若者達。また金をせがむジプシーの子供。みんな無視した。暑い中、坂道をようやく登ってカセドラルへ。スペインの大司祭の主座だけあって、巨大で荘厳だ。なかで、しばらく涼んだ後、更に道の奥に進んだところにある Casa del Greco (グレコの家) に行った。本当はエル・グレコの家では無いらしい。彼が、ユダヤ人街のビリャーナ侯爵所有の家を借りて済んでいたことは確かだが、どこにその家があったのかは分からない。20 世紀の初め、国立観光局長の職にあったベガ・インクラーン公爵がエル・グレコの再評価が高まってきたので、観光政策としてトレドにエル・グレコの家を造ることを思いついた。そこで廃墟になったサムエル・アレビの館を買い、16 世紀の調度を並べ、エル・グレコの絵を集め、1911 年に開館したのがこのエル・グレコの家らしい。まあそんなことはどうでもいいが、中にはやはり一目でわかるエル・グレコの絵がたくさんかかっていた。トレドの町は小高い丘にそってできた町で、丘そのものが町のようにになっている。町の中心が丘の頂上で、ここから下を見下ろすと赤茶けた大地に、緑がところどころに見えるいかにもスペインといった風景であった。コペンハーゲンを出てきたときとの、この気候の違いはすごい。激しすぎる。感慨にふけりながら町を下って、再び駅に向かう。ちょうど腹も減ってきたので駅前のバルで昼飯を食べる。

床はえびの殻が散らかり汚い。そういえば、スペインのバルでは食べかすを床に捨て、また汚ければ汚いほど、料理がうまいと判断され客がつくので店のほうでも掃除しないときいていたが、まさしくこれだ。とすれば、この店はうまいに違いない。いままでバルセロナのバルに行ったが、このようなことは無かった。マドリッドでは、考えてみればまだバルに入っていなかった。私も、えびのから揚げとサングリアを頼んだ。店の中のゲーム機からラ・クラカチャのメロディが流れる。これはこれからアンダルシアを巡る旅のなかで、あちこちで聞かれるもので、そのうち頭にメロディがこびりついてしまった。サングリアのあまり強くないアルコール度数のためか、ほの

かに酔った感じで気持ちがよくなり昨日のいやな事件のことがあまり気にならなくなった。

帰りは、普通列車で戻る。ゆっくりと、各駅に止まる。約1時間30分かかる。アトーチャ駅に向かう途中、車両基地があり日本のEF66という電気機関車と告示した電気機関車が停まっていた。前述したように、スペインは1620mmの広軌であり、日本は1067mmの狭軌であり同じものであるはずはないが、あまりによく似ているので、おそらく日本のメーカーがスペイン国鉄用に作ったのだろうと考えた。アトーチャ駅からは、またSOLに行き、今日はどうしようかと考えたが、明日はいよいよアンダルシアに旅立つこともあり、また昨夜のこともあったから快適な宿で、ゆっくり夕飯を食べることにしてエル・コルテ・イングレスで食事とワインを買い込んだ。また、このデパートには本屋もあったので、英西・西英辞典が無いかさがしてみた。何とあのドイツで重宝したランゲンシャイドのシリーズが売っていた。やはり日本円で800円(800ペセタ:1ペセタ=約1円なので計算しやすい)。迷わず購入した。ソルの気温計は43℃。今日は、ゆっくり休もう。村田君はマラガに向けて旅立ったはずだ。

今日はコルドバに向かう。チャマルタン駅発が8:30なので7:00には宿を出ようと思っていたが、なかなか宿の主人が起きてこない。“オイガ”(スミマセン)“ブエノス・ディアス”(おはようございます)と何度も呼びかけて、ようやく主人が眠そうな目をこすりながら起きてきた。朝の7:00はまだ宵の口なのだ。これからも行く先々で同じことに悩まされることになる。精算し、メトロにのってチャマルタン駅に。

列車は、結構きれいな電車で、実はタルゴの次に優等なのではとおもった。発車するとしばらく地下を走った後、アトーチャ駅に到着した。なあーんだ、ここからでも乗れるんだ。考えてみれば、トレドに行く列車は、アンダルシア行きの本線上をしばらく走るのだからアトーチャ駅はその通り道のはずだ。

見慣れた光景を見ながら、アランフェスを過ぎる。これからは、まさにスペインの風景を楽しむことができる。ひまわり畑もたくさんあったが、以前アレックスとエバに聞いていたように、もうその盛りは過ぎ枯れたものもありあまりきれいじゃなかったが、最盛期の季節に訪れたらさぞかしきれいだろうと思われた。やはり、この列車は優等列車のようで、RENFEの雑誌と新聞のサービスがあり、また社内にはビデオが流れていて、ヘッドホンサービスもあったがまるきりスペイン語なので私はもっぱら車外の景色を楽しんだ。

カンポ・デ・クリプターナを過ぎると、有名な風車が見える。ラ・マンチャの風車である。コルドバには定刻の13:20よりわずか10分くらいの遅れでついた。今日の宿は、地球の歩き方に出ていたメスキータのそばのホステルにしよう。列車を下りると、すごい熱気。湿度も加わり蒸し暑い。シエスタに入っているだろう人通りの少ない町を歩いてホステルに。受付のとき、“オートレ・ハポネス・・・”といわれ、別の日本人と相部屋にしないかとのことだったが、なんだか疲れてしまって、今日は静かに一人で過ごしたい気分だったので“シングルにしてくれ”と頼み込んだ。結局ツインルームに入れられた。もしかしたら別の客が入ってくるかもしれない。それだったら日本人と一緒にのほうがよかったのにと考えた。しかし、結局シングルユースであった。



昼下がりのこの hostel 内で誰かがギターを弾いているが、これがまためっちゃくちゃうまい。マドリッドとは違う暑さとあいまって、いやがうえにもアンダルシアの旅情を深めてくれた。荷物を置くと、飯を食べに町に出た。暑い。バルに入る。床が汚い。期待できそう。腹も減っていてたくさん頼んだ。今日はワインでなくビール（セルベッサ）に使用。ラクラカチャの音楽の スロットマシーンがここにもあり聞き覚えのあるフレーズが耳にこびりつく。ほろ酔い加減になり気分がよくなり今度は回教寺院（メスキータ）に行く。まさにイスラムの雰囲気。



（コルドバ、メスキータの周り）

さらにユダヤ人街に入り込むと、白い壁の家に緑の窓枠、窓辺の花、パティオにはオレンジの木と、想像していたのと違わぬアンダルシアの光景であった。メスキータのそばで、革のカーボーンハットを売っている人がいた。いくらかというと 1500 ペセタ。そんなに高くない。しかもこれからアンダルシアを回るのに重宝しそうだ。記念にもなる。値切りもせず買おうとしたら。日本人かときかれ、そうだと言うとなぜか 1300 ペセタに負けてくれた。“ムーチャス・グラシアス”（どうもありがとう）。グアダルキビール河にかかるローマ橋を渡る。この川を下るとセビリヤである。しかしなんとスペイン的な名前なのであろうか。それにしても暑い。眠くなってきた。そういえば、シエスタをしていない。

宿に戻ると、部屋の入り口の前の中庭で、2人ずれの外国人がビールを飲んでいて、挨拶を交わし。一緒に飲まないかと誘われたが、“疲れているから勘弁してくれ”と断って、ベッドで寝てしまった。マドリッドと違い、ここは暑い。非常に寝苦しかった。それでも疲れと、ビールの酔いのため眠りこけてしまっていて起きたときには、周りも真っ暗になっていた。町からは、にぎやかなコンサートのような音と、ざわめきが聞こえる。そういえば今日は土曜日。何かの祭りなの

だろうか。しかし、今までの疲れがどっと出たのか。外に行く気にもならず、再び眠ってしまった。

朝はさすがにここコルドバも涼しい。今日はグラナダに行く。シエラネバダ山脈を望む高原都市まではアクセスが難しく、いったんセビリアに行ってそこからローカル線で行かなければならない。マドリッドからの直通もあるようだが、それはコルドバのずっと手前のリナレスから別れてしまい、グラナダに向かうようだ。あさチェックアウトしようと思ったが、案の定7：00には誰もおきてない。大声で声をかけると、やはり眠そうな目のおばさんが出てきた。なんだか申し訳ない。

通りを駅に向かう。涼しくて、別の町を歩いているようだ。町に人通りはほとんど無い。駅に着くとさすがに、まばらに人がいた。発車時刻表を見ると、なんとまもなくセビリア行きが着そう。しかし、いくら待てど暮らせど来ない。やっぱりスペインの列車かとあきらめた。時刻表を見直すと、注釈のところに **domingo** 何とかと書いてある。もしかしたら、**domingo** “ドミンゴ” で日曜のことで、それって、日曜運休と書いてあるのかなとランゲンシャイドを開いてみたらどうやらそのようだ。そうこうするうちに、別なセビリア行きが着たので乗り込んだ。結構込んでいるが、ひとつのコンパートメントに開いた席を見つけて乗り込んだ。ジプシーとおもわれる男の子が乗っていて、しきりにアミーゴ、アミーゴとよってくる、体を触ってくるので、もしかしたらこれって、財布を捜してんじゃないのかと邪推？して、軽くかわしていたがなんとなくうとうとしかった。本気で挨拶してくれているんだったら申し訳ないが。

やがて、グアダルキビール川沿いに、いかにもアンダルシアの情景の中を列車はセビリアのプラザ・デル・アルマス駅についた。さて、ここからグラナダ行きが発車するサン・ベルナルド駅までは歩かなくてはならない。東京の上野駅、新宿駅のような感じだが、その間の連絡鉄道網がこちらには無いのが不便である。もう駅の外は、まばゆい陽光が照りつけ猛烈な暑さになっている。グアダルキビール川の川べりに沿って歩く。

ようやくにしてサン・ベルナルド駅に着くと驚いたことに、村田君がいた。あれ、マラガに行くんじゃないか。彼は、予定を変更し、まずセビリアに滞在し、グラナダに行ってからマラガに行くコースにしたらしい。なんだか、とてもうれしかった。グラナダまで一緒に行けるのだ。発車時刻を確かめ、駅前のバルで食事をする。セビリアは昨日気温が48℃あったらしい。どおりで、コルドバも暑かったはずだ。マドリッドの宿屋での辻強盗騒ぎを、村田君は知らなかった。こんなことがあったんだと話すと、彼はその後、宿に帰ってきたらしい。間一髪で難を逃れたようだ。あぶない。あぶない。

セビリアのサン・ベルナルド駅 12：20-17：48 グラナダ着の予定である。列車はいかにもローカル線のディーゼル列車。なんとなくのどかで、気分がよい。アンダルシアの肥沃な大地をしばらく走ると、徐々に山岳地帯に差し掛かる。ここからは、赤茶けた荒野を列車はエンジン音を高めながら登りだす。途中、白い家の町々を通る。イメージ通りの風景だ。アンダルシア旅情満点。グラナダ到着。そんなに遅れてない。列車を降りるとき、4人組の日本人旅行者たちと知り

合った。みんなスペインが好きで、ばらばらにやってきたのだが、どこかで意気投合しそれから一緒に旅しているらしい。中園さんという女の子は、外語大のスペイン語学科で学ぶ才媛でさすがに流ちょうである。みんなで一緒にの宿にしようということになり、その中でもっとも年長のTさんが、いい宿を知ってるということで街中のホテルに連れて行ってくれた。ホテルの受付は、中園さんがやってくれた。ツインルームのシングルユースで1000円程度。夕食はみんなでフラメンコを見ながら食べようということになった。しばらくベッドで休む。グラナダは、高原都市でありマドリッドと同様、屋内は涼しい。このまま寝入ってしまいそうだったが、約束の時間になってしまった。

サクロモンテの丘、洞窟の中でフラメンコを見る。仲間がいるといいものである。一緒に踊った。ZAMBRA LA ROCIOという洞窟のタブラオ。最近のガイドブックにはサクロモンテは立ち入り厳禁と書いてあった。だんだん治安が悪くなってしまったのか。すばらしい踊りと、ギターの調べを聴いたあと拍手をすると、プロピーナ（チップ）とつきまとう踊り子達。そこで私は失敗した。あまりに良かったので一人に100ペセタ渡したらさあ大変。ほかの踊り子まで群がってきた。挙句の果てに、もらえない踊り子が不公平だと怒り出す始末。やっとのことで、かわして外に出た。後にNo Tengo “ノー・テンゴ”と言って突き放すべきであることは、セビリアで会うことになる小倉さんから聞いた。そこから少し下ったテラスでみんなで夕食を食べた。ターロ川を挟んでアルハンブラ宮殿が幻想的にライトアップされている。先ほどのチップの一件では、みんなで大笑いした。このような失敗はいい酒の肴になる。

明るく7月31日は、何をおいてもアルハンブラ宮殿に行かなければ。今日も天気が良い。ゆっくり起きだして、アルハンブラ宮殿に向かう坂道を登る。途中、地元の若者に手招きされたが、なんかやばそうだったので遠慮する。グラナダは、高原でもあり、それほど暑いという感じはない。快適だ。

アルハンブラとはスペイン語で赤い城の意味である。3つの部分からなる。アルカサーバ Alcazaba（ここからの景色は絶景。アルバイシエン、昨日行ったサクロモンテの丘が見える。）、王宮（天人花のパティオ、獅子のパティオがある）、ヘネラリーフェ（夏の離宮で、全長50mのアセキアのパティオがある）。かつてのナスル朝の栄華の後をしのいだ。ゆっくりと散策した後、野外のカフェテラスでサングリアを飲む。パナシェと言うビールとオレンジジュースのカクテルを知る。フランス人がよく飲んでいて。ここでまた、実家に絵葉書を出す。スペインのたびもだいぶ慣れてきた。勘定は“ラ・クエンタ・ポル・ファボール La cuenta, por favor.である。



(上：アルハンブラ宮殿よりアルバイシンを望む 下：宮殿内のパティオ)

午後は、ゆっくりとシエスタをとる。スペインでも、ことにアンダルシアではしっかりとシエスタを取るようで、この時間帯は店なども閉まってしまう。結局、旅行者も何もできなくなってしまふのである。郷に入らば、郷に従えである。夜は、新婚旅行で来ている中川さんご夫妻、村田

君と一緒に、夕食をとる。ロンダやコスタ・デル・ソルのマラガに行く予定とのこと。楽しくおいしかった。羊の腎臓を食べたが、これはレバーのような味でまずかった。レストランの主人と記念写真をとったりと、楽しいグラナダの夜は更けていった。宿に帰るときには、12時近くになっていたが通りには子供連れの家族もいっぱいいたのには驚いた。

翌朝、ホテルを出るときにはやはり宿の人は眠そうである。スペインで7:00はまだ夜明け前なのであろう。駅までは結構遠いので、途中で間に合わない可能性が出てきた。

駅までタクシーで行く。スペインでタクシーに乗るのは初めてなので、ぼったくられないようにあらかじめ値段を確かめた。シトロエンのタクシーで、やはり助手席に乗せてくれた。あとで気がついたことだがスペインのタクシーは、バルセロナを除いて、グラナダ、マドリッド、セビリアともにシトロエンであった。駅につくと、若干時間があつたので、駅のバーで朝食を取る。

グラナダ 8:05・サン・ベルナルド 12:17 の、例のローカルなディーゼル列車だ。

一度通った道筋でもあり、ゆったりと景色を楽しみながら旅の思い出を反芻した。

中川さんたちは、今日はアルハンブラ宮殿も行くのか。村田君はマラガに向かっただろうか。確かに、コスタ・デル・ソルのマラガは魅力的でもあるが、アクセスが煩雑なので、後の予定に支障をきたす。私はセビリアに行こう。アルヘシラスというアフリカへの窓口の町にも行きたいが、これもちょっと難しい。

たいした遅れも無く、列車はセビリアのサン・ベルナルド駅に到着した。駅前のテラスで食事をしていると、手招きをしている人がいた。小倉さんという日本人だった。スペインでテキ屋をやって食いつないでと言う強者であった。いろいろ面白い話を聞かせてくれた。マドリッド郊外に畑（カンポ）ももっていて、そこで農作物も作っているそうだ。スペインにきたら、大変気に入ってしまって、いついてしまったらしい。ジプシーの子供が、例のごとく寄ってきたが、**No Tengo!**とってあしらうことを、教えてくれた。フラメンコを見たいといたら、ロス・ガジョスというサンタクルス街のタブラオが良いと教えてくれた。宿もその近くの安宿に決めた。フラメンコの店はすぐ前である。小倉さんがつきあってくれた。フラメンコは、21時と、23時の開園だそうだが、遅いほうが盛り上がるので後半に行くことにした。

小倉さんと街を回るが、スペインはタクシーが安いそうで、タクシーを使いまくる。確かに安い。小倉さんと一緒ならまず安全だ。シエルペス通りというセビリアの繁華街に行く。ここにも、エル・コルテ・イングレスがあった。再びサンタクルス街に戻る。サンタクルス街はいかにもアンダルシア。カテドラル、ヒラルダの塔のあたりを散策。ヒラルダの塔:回教徒により1193-1198年に建立された。

ここでDavid（ニースの金持ちの息子で、ローザンヌで宝石鑑定士の勉強をしているらしい）と知り合う。一緒に町を回ろうということになり、彼が荷物を宿に置いてくるのに付き合う。ムーチョ・カロール（めちやくちやあついな）と現地人と挨拶を交わす。昼の挨拶はセビリアでは、ブエノス・ディアスでなくムーチョ・カロールだそうだ。グアダルキビール河に飛び込む人たち。黄金の塔（キリスト教徒がこの町を征服する前に、回教徒が1220年にたてた。）の見え

る、川沿いのテラスでビールを飲む。めちゃくちゃおいしい。セビーリアは伊達政宗の遣欧使節、支倉常長が初めてヨーロッパの土を踏んだ街。今では、グアダルキビール河の水位が下がり、船が航行できなくなり、港町では無くなってしまった。小倉さんとは、マドリッドで会う約束をして別れた。マドリッドアントニオ・ロペスのさる酒場の名前を教えてくれた。



(グアダルキビール川のほとりで、David と小倉さん)

アンダルシアは美人が多いから、是非酒場に行くべきだと勧められ、ロス・ガジョスの開演 11:00 まで、飲み屋で過ごす。確かに美人が多い。ドン・ファンはこの町の貴族の息子だし。カルメンがタバコ工場で働いていたのもこの町である。おぼえたてのスペイン語で、“イン・アンダルーサ・アイ・ムーチャス・セニョリータ・ブエノ” “アンダルシアには、美人が多いね。”などと世辞まで口から出てくる。楽しいひと時を過ごして、10時過ぎ宿に戻る。宿の主人に、隣でフラメンコを見てくると告げてから出かける。もし、終わって帰ってきたときにあけてもらえなかったら大変である。

開演前に、中に入りとりあえずサングリアを頼む。もう中は、客でいっぱいである。11時になり、フラメンコのショーが始まった。踊り子のおどりも、ギターの音色も圧巻である。また、グラナダで聞いたのとは異なり洗練されているような気がする。グラナダのはいかにもジプシーが、それで生計を得ているといった感じで、泥くさかった。それはそれでももちろん良かったのだが。次々と繰り出される、熱いフラメンコのリズム、音色、そして踊り。いやーすばらしい。わざわざ、セビーリアまで着てよかったと思った。

ショーに酔ったといったほうが良いのかもしれない。時のたつのも忘れていた。お開きになると、時間はすでに午前一時を回っている。興奮冷めやらぬまま、宿に。果たして、宿の主人は起

きてくれているだろうか。大声で“オイガ”（すみません）とノックする。待ち構えていたかのように、すぐにドアが開き。ほっと、一息。ベッドに入って、すばらしい今日一日の思い出に浸った。さて、明日はカジスに行こう。これは、小倉さんにアルヘシラスには行けないし、と話をしたら、それじゃ、カジスに行ったらと勧められたものだ。ちょうどサン・ベルナルド駅から列車はたくさん出ているようだし。逢坂 剛の小説にそういえば“カジスの赤い星”という小説があったなあと思い出した。

昨夜は、暑くて寝苦しかったが、朝はとても涼しい。サンタクルス街から、タバコ工場（現セビーリア大学）を見ながらエスパーニャ広場へ。

鉄道でカジスに向かう。途中までは、昨日グラナダから着た線と同じである。ウトーレラという駅から別れてカジスに向かう。カジスはセビーリアの 153 キロ先にある不思議な町だ。グアダルキビール川の河口の近く、大西洋に向かって突出した半島にある不思議な街だ。肥沃なアンダルシアの大地を、列車は南下する。カジスに近づくにつれ、道路などの標示がローマ字とアラビア文字になりアフリカに近いことが実感された。

途中 100 キロのところシェリー酒の原産地ヘレス・デラ・フロンティエラがある。結構大きな町である。そこからしばらく今度は、砂漠のような台地を走った後、どちらを見ても海の、長い砂州をわたってカジスに到着した。



(上左：グラナダのレストランで中川さん夫妻と、上右：グラナダ、サクロモンテの洞窟で  
下左：村田君とセビーリア、サン・ベルナルド駅、下右：カジスの全景)

泳ぎたかったので、通行人に“ドンデ・ナダール？”（どこで泳げるのか？“と聞くと。コルタ・デューラだと教えてくれた。さらに、バス停まで連れていってくれて、待っている人に、このセニョールがコルタ・デューラに行きたがっているから連れていってくれと頼んでいるようだ。そしたらその人が、一緒にバスに乗ってくれて、途中まで来ると、また別の人に同じように頼んで、更にまた途中まで来ると別の人が頼まれて、数人のリレーのおかげで無事たどり着いた。

まずトイレ。立ち売りに、どこにトイレがあるか？”ドンデ・エスタン・ロス・セルベシアス？“と言ったつもりが ビールはどこだ？”ドンデ・エスタ・ル・セルベッサ？“と勘違いされたらしく、思いっきりよくビールを出してくれた。便所の事だと身振りで聞いて、ビールはその後だと言って教えて貰った。

ビールもうまい。レストランに荷物を預け泳いだ。気持ちいい。目の前に広がるのは、大西洋。アフリカ大陸は見えない。あまりに気持ちが良いので、ご機嫌だったので、荷物をこころよく預かってくれたレストランのボーイに 500 ペセタもチップをやったらびっくりしていた。そこから、しばらく歩いて、途中からバスに乗った。街では、ハシシをやらないかと勧められたが、捕まるのは嫌なのでやめた。

スペインではよくチーノ？（中国人か？）と聞かれる。日本人だ（ソイ・ハポネス）と答える。スペイン人は ジャッキーチェンの映画が好きらしいが、彼を日本人と勘違いしている。日本人という、カラテ？と聞いてくる。私も調子に乗ってシーと言いながらかまえを取るとみんな、“おっ”と、びっくりする。俺と勝負しろなど行って来る人がいなくてよかったものだ。酒場でよくこれをやって受けていた。

（下：コルタ・デューラの海岸、海は大西洋）



帰りの鉄道の中で、またシガロとせがまれた。ノーテングと答えてやった。帰りの鉄道から見



える景色も、のどかなアンダルシアの光景で、気持ちが和んだ。夕飯は、またサン・ベルナルド駅のそばで食べる。

宿の主に、明日はマドリッドに行くから7:00に出るぞとあらかじめ言っておいた。はたして通じたものか。“マニャーナ、アラスシエテ、バモス・ア・マドリ、テンゴ・ケ・イール・テンプラダ”（明日、朝7時頃、私はマドリッドに行く。だから早く出なければならないのだ。）また、主人を起こすのに手間取ってはいられない。

7:00に何と宿の主人がおこしに来てくれた。今度はタクシーで駅に行く。セビリア、プラザ・デル・アラムス駅8:30発、マドリッド着14:38の特急である。見慣れた光景を、快適な車内で過ごす。しかも、相席の人はいないとおもってくつろいでいると、なんと自動小銃をもった警官が座った。まあ、私は何も、悪いことをしているわけじゃないので、かえって安心だわいと思った。ただ、会話がなにも気まずいので、彼にアントニオ・ロペスの位置を聞いてみた。私の、マドリッドの地図で教えてくれてしかもプラガ・ホテルという日本人がよく泊まるホテルがあると教えてくれた。

赤茶けた光景を、北上。リナレス、バルデペニャス、マンサナレスと過ぎ。風車が、また見える。アルカサール・デ・サン・フアン、アランフェスと停車して、再び、マドリッドに到着した。今回は、少し治安の良いところと思い、プリンセサ通りのあたりにホテルがないか聞いてみたら、5つ星しかない。結局、まあ、マドリッド最後の夜だし、三ツ星くらいまで奮発しようと思った。そしたら、ホテルは何と一番危険なテレフォニカの裏のフエン・カナルにあるようだ。

Hotel Laris という三ツ星。まあ、ホテルが三ツ星なら大丈夫だろう。地下鉄でSOLまで行って。フエン・カナルへ。真昼なのに行くまでに怪しい男が何人もいる。明らかにジャンキーと思われる男も。荷物をおいて、散策へ。帰りはアントニオ・ロペスからタクシーで来ればいいじゃないか。そういえば、今日の飲み代がない。

エル・コルテ・イングレスの中に、両替もあるだろうと、店員に聞いてみた。“ドンデ・エスタス・カンビアル・ディネーロ？”（どこで両替できますか？）“シンコ・・・”5階のようだ。“ムーチャス・グラシアス”（ありがとう）。なかなか通じるものだ。ソルで時間をつぶす。立ち売りでオルチャータを買って飲む。これがなかなかうまい。アーモンドにスイカかメロンの種、それにチュファというカヤツリグサ科の植物の塊茎（クワイのようなもの）、これらをつぶしてジュースを抽出した物。マドリッドの乾いた暑さにはぴったり。

非常にうまい。マドリッドにいる間に、何度も飲んだ。待ち合わせ時間が近づいてきたので、警察官に教えられたとおりに地下鉄に乗ってアントニオ・ロペスの店の前に行く。

はたして、小倉さんはやってきた。タクシーでプエルタ・デル・ソルへ。ここで小倉さんと、さんざん飲んだ。なんとなく安心感もある。バルを3件くらいはしごした。グアダラハラからきた男。ハンブルグから遊びに来ているドイツ人。楽しさのあまり飲み過ぎた。例の空手のパフォーマンスもした。時計を見ると午前3:00やばい。時のたつのも忘れていた。これからあの危険なところにあるホテルに帰るのだ。しかも、ここからなら近すぎてタクシーは乗せてくれない。

小倉さんと別れてホテルに向かう。飲みすぎたのを後悔した。しかし、こうなったら仕方がない。自分は空手の達人だと思い込み、自分で暗示にかけてホテルまでナイフをもちながら歩く。さすがに、殺気だった様子からか、怪しいやつには誰も会わなかった。また道に迷ったらどうしようと思ったが、ホテルに着いたときにはほっとした。ボーイが、なんと鉄格子（昼間にはみなかった）をあけて入れてくれた。後は、ゆっくり休もう。さすがに、三ツ星だけはあってきれいなバスルームもある。バスタブにゆっくりつかった。

昨日はさすがに飲み過ぎた。二日酔いである。10:00にプエルタ・デル・ソルで小倉さんと待ち合わせをしてある。荷物をホテルに預かってもらい、ガンガン痛む頭でソルに。

一緒にラーメンを食べた。ひさしぶりのラーメン。しかも700円程度で安い。うまい。またここでは、日本の週刊誌を見ることができた。小倉さんと、また今度は日本で会いましょうという別れた。日本からはめてきた安物の時計が壊れたのでエル・コルテ・イングレスで時計をかった。結局、散々悩んでかったのも5000ペセタの日本製の時計だった。更に、町のお土産物屋をのぞくと、ちょうどいいお土産になりそうなかっこいいキーホルダーがあったので、後輩やクラブの仲間の分を大量に買い込んだ。また、荷物も増えてきたのでエル・コルテ・イングレスに戻り安物のビニールバックを買う。女物だったが、別に誰もわからないだろうと気にしなかった。ただこのバックの表には大きく“Lady”と書いてあるのだが。今日もオルチャータが非常にうまい。時間になり、地下鉄でチャマルタン駅に行く。いよいよこれから最終目的地のパリに向かう。考えてみれば、やはりスペインに来て良かった。

チャマルティン駅では同じ年頃の一人旅のフランス人と会話が弾んだ。モン・サンミシェルの事を言ったが通じなかった。あんなに有名なのに。私の発音が悪かったのであろう。彼は、ポルトガルに向かうとのことであった。ボン・ボアイヤージュを言って別れた。時間になり列車に乗り込む。きれいな列車だ。パリ行きの“プエルタ・デル・ソル”18:10発、私の番号は92番。車掌にチケットとパスポートを渡して乗り込む。いろいろなことのあったスペインを離れるのだ。楽しいことも、怖いこともあった。感傷に浸りながら、窓の景色を眺める。ブルゴスにつくあたりで、女性2人と男性1人の同室者にスペイン語で“オイガ・アブロ・ウステ・イングレス？”（英語を話しますか？）と聞いたら、彼らは非常にびっくりして、“シー、シー”（もちろん）それ以来英語で会話が弾んだ。カジスでのセルベッサの顛末は大いに受けた。女性のうちベニルダはパリ大学で生化学の研究者をしているらしい。わたしより若干年上かな。弟がカセルドラといい、覚えにくい名前だと言ったら”教会”のことだと教えてくれた。若い方の女性はアントニアといいカセルドラの恋人で、一緒にパリ見物に行くらしい。日本のこと、スペインの事ではなしが弾んだ。刺身のこと。わさびのことなど。

スペイン人とイタリア人は、言葉が非常に似ているのでお互い、母国語を話していても話が通じるらしい。ベニルダ、カセルドラ、アントニア、お互いファーストネームで呼び合った。ベニルダは今度スペインに来たときにはマヨルカに是非行ってくれと教えてくれた。楽しいひと時を過ごし、夕飯はみんな持込だったので分け合って食べた。腹もいっぱいになると眠くなり、アデ

イオスで眠った。この列車は、パリまで直行できる列車だ。タルゴではないので、途中のアンディという国境駅で台車の付け替えがあるはずだ。もちろん、その間乗客は列車の中で寝たままだ。客をのせたまま列車を吊り上げて交換するらしい。

しばらく眠った後、金属的な音で目が覚めた。時間を見るとアンディに停車中の時間だ。まさに自分たちが台車の付け替えをさえている。Hendaya の停車時間は 2:08~3:36 である。またすぐに寝てしまった。

夜明け。カセルドラと一緒に朝食に行かないかと誘ってくれた。ベニルダ、アントニア、カセルドラで連れ立って食堂車に行く。席はほぼ満席で、アントニア、カセルドラと一緒に、ベニルダと私は、一人分ずつしかあいてなかったの、それぞれ他人と相席になった。食堂車からの帰りに、カセルドラと一緒にフランスの景色を見る。“スペインとは全然違うだろう。あの荒れた、激しい景色をみると、故郷に帰ってきたことを実感するんだよ。”

“たしかに、景色が穏やかでやさしい気がするね。”席に戻り、いろいろ話していると。今度は女車掌がやってきた。パスポートを返してくれる。なんだかつつけんどんで、みんなで顔を見あわせた。カセルドラが、スペイン語で悪口をいう。やわらかな、景色の中、徐々に建物が増えてくる。パリに近づいているのだ。最後の一走りをして、私たちをのせた“プエルタ・デル・ソル”はほぼ定刻(珍しい?) 10:30 にパリ。オーステルリッツ駅に到着した。素晴らしい仲間達。お互いの旅の成功を祈りあい別れた。いまになってみると、なぜこのとき写真でも撮って、住所を聞いておかなかったのだろうかと後悔した。なんか、あまりに打ち解けて、自然な形で友達になったので、それらの行為がいかにも日本人的でせつかくのいい印象が崩れるのでは、無意識のうちに危惧したのではないだろうか。何はともわれ、すばらしい旅の一コマであった。

## エピローグ (魅惑のパリ)

さあ、憧れのパリだ。まずはインフォメーションで宿をとる。よし、一年間気合を入れて勉強したフランス語の出来を試す時だ。順番を待っていると、日本人の家族連れにあった。“これから宿をとるのですか?” “そうですよ。” 家族で旅行しているらしく、ちいさな娘さんを二人連れてくる。インフォメーションの窓口でまずはフランス語で“ボンジュール。エクスキュゼモア、ジュヴードレ・アボワール・レゼルバシオン・ドテル。パルレ・ブ・オングレ?” (こんにちは。ホテルを予約したいのですが、英語を話しますか?) と言ってみる。” **Oui** ウイ (はい) と帰ってくる。通じたぞ。しかし、その後は、英語で私と、ご家族連れのぶんの宿を取ったのだが、なんだかひどくつつけんどんなので、最後にドイツ語で”バスフィアー・アイネ・シュレヒテ・ベディーヌング!” 何てひどいサービスだ! と言ったら周りの、ドイツ人と思われる連中に非常に受けた。家族連れのお父さんがびっくりして“ドイツ語も話すのですか?” としきりに感心してくれた。聞けば、北大の数学の教授で、以前ハイデルベルク大学に留学していたこともあり、今

回は家族旅行でドイツとフランスを周遊されているとのことだった。紹介されたのはサンマルタンの安宿である。

みんなで宿に向かう。あこがれのメトロ。ディレクション（行き先）、アントレ（入り口）、ソルティエ（出口）、コレスポンドン（乗り換え口）の表示を頼りにメトロに乗ってサン・マルタンへ。宿の女主人に、今度は全部フランス語でトライしてみる。先払いとのことだが、いま、手持ちの金がないから両替をした後でもいいかということまで伝えることができた。北大の先生も無事チェックイン。

まず、両替をしに東駅に行く。そしたら驚いた。何と、バルセロナに行く列車で一緒になった女性と偶然会った。ポルトガルに行っていたという。再会を喜んだあと、またお互いの前途を祝してわかれた。やはり、所詮、このような旅行をしている人は、私も含めて、自分勝手な行動のとれる一人旅のほうが良いのである。前払いの宿代を払った後、ストラスブール大通り（これは更に南に行くと、セバストボル大通りとなり、更にセーナ川を渡るとサン・ミッシェル大通りとなる。）沿いのビストロで昼からワイン付きの優雅な食事。最高の気分。ワインでほろ酔い加減となり宿に戻って昼寝。外で遊ぶ子供の声。幸せな気分。その後フォーラム・レ・アール、シテ島、ノートル・ダム寺院、市庁舎と歩く。夢にまで見たパリの風景が、すぐ目の前にある。

シテ島はパリの中心であり、その名の由来であるケルト系パリシー人が、この島に集落を作ったのが始まりであるそうである。ノートルダム寺院の下流には、パリ警視庁、最高裁判所、フランス革命の時、拘置所となったコンシェルジュリーなどがある。マリー・アントワネットやダントン、ロベス・ピエールなどがギロチンにかけられる前に収容された。マリー・アントワネットは、オーストリアの女帝マリア・テレジアの娘として生まれ、奔放かつ傲慢、革命にも屈しなかった。

この美貌の王妃が、ただ一度泣き叫び許しを請うたのは、7歳の息子の助命であったという。この王妃の髪の毛が、一夜にして白髪になってしまったとの逸話を聞いたことがある。これらの事柄に、目の前の景色を見ながら思いを寄せた。宿の近くのマクドナルドで夕食。280円、安いコペンハーゲンでは1200円相当である。

翌朝。女主人がプチ・デジョネーとおこしにくる。テーブルでは若い白人女性と一緒に。どこから来たのかと聞くと、カナダのサスカチュワンだというのが、あまり話をしたくないらしく、重苦しい雰囲気。

ストラスブール・サンドニの駅からメトロでコンコルドへ。メトロの駅には、フランクリン・ルーズベルトや、ジョルジュ・サンク（ジョージ5世）など人名や、9月4日駅など戦争にちなんだと思われる駅名が多い。

コンコルド広場、シャンゼリゼ通り、凱旋門、シャルルドゴール広場と散策する。コンコルド広場には、エジプトから送られたというオペリスク。シャンゼリゼ大通りは公園のようなおおりだ。凱旋門に向かって、緩やかな上り坂。公衆トイレが少ない。ところどころに小さなドームの

ような公衆トイレがあるが、これは金を払わなければならない。1フランを入れるとドアが開き、使用中は音楽が流れる（ここまでしなくてもいいような気もするが、そこはさすがのパリなのであろうか）。

凱旋門のある広場は、シャルル・ド・ゴール広場と言われるが、12本の道路がここから星のように放射状にのびることからエトワール広場とも言われる。凱旋門はパリの象徴。19世紀の初めにナポレオンの命をうけて、フランス軍の凱旋のために立てられたものである。結局、ナポレオンはここを遺体となって通った。またビクトル・ユーゴーの遺体が、一夜安置されたりもした。凱旋門の真下には、第一次大戦の無名戦士を悼む永遠の炎が燃えている。

シャンゼリゼのカフェ。ゆったりと優雅な時間が流れる。歌手のクレモンティーヌはいみじくも”お金を払って、時間を買うのよ。”といったそうだ。

パレ・ロワイヤル、ラーメン屋があった。しかも400円程度で安い。食べてみたら結構うまかった。結局、この店に昼飯に3日間通ってしまった。やはり日本人はラーメンが恋しくなるのである。コンコルド広場で、写真のぼったくりにあった。勝手に写真をとっておいて100フランせびる。いらぬといっても聞かない。結局一枚、ただであげるからと100フラン払わされた。やられた。じいさんだったので油断してしまった。非常に頭に来てしまいそのあとノートルダム寺院に上ったときに中に浮浪者がいて金をくれとせがまれたが、働け”トラバユ！！”と怒鳴ってやった。まあそれで幾分かはずっきりした。

その辺を散策した後、今日は宿でゆっくり飯を食べようと思い。スーパーで食べ物や、飲み物を買って宿に戻った。このような一般市民と同じことをしたほうが、旅情が深まるような気がする。せっかくパリに来たのだから、チーズ（フロマンジュ）とワインも忘れずに買った。

8月7日は朝から小雨のそぼ降る天気だ。今日はルーブルに行こう。雨のパリ。これもまた一興。ルーブルは雨でも平気だ。もぎりは北アフリカの黒人。ミロのヴィーナス、サモトラケのニケ、モナ・リザ、ダヴィッドのナポレオン一世の戴冠式など超有名な美術品をゆっくり味わう。古代エジプト、ギリシャ、ローマ、オリエント美術から近代美術までそろそろ。世界一の美の殿堂といわれるゆえんだ。私にとってはラファエロの”美しい女庭師”ドラクロワの”民衆を率いる自由の女神”が印象的だった。ルーブルで、ゆっくりと時間を過ごした後、また市内の散策に出かけた。カルテ・オランジュを買う。これは、パリの地下鉄や市内バスに乗り放題の、1週間定期である。しかも安いので、重宝する。写真を貼る欄もあったが、パスポートを紛失した際のために持っていた予備の写真を使う。もうパリまで来れば、何とでもなりそうだ。

雨が降っているので傘を買おうと思って、プランタンの三越に行って、案内のフランス人女性に安い傘は無いかとフランス語で聞いたら、ギャラリー・ラファイエットに行ったらありますと日本語でかえってきた。

行ってみると、巨大なデパートで探しているうちに雨がやんでしまい、結局買わずにすんだ。いかにもパリのデパートで、その華やかな雰囲気は日本のデパートとは比べ物にならない。オーシャンゼリゼを口ずさみたくなった。“オーシャンゼリゼ、オーシャンゼリゼ、オソレ・ソラピ

ユリ、ア・ミディ、ウ、ア・ミニユイ、イリヤ・トスケ・ブブレ、オ、シャンゼリゼ”（シャンゼリゼには、シャンゼリゼには、天気の日も、雨の日も、昼も夜も、あなたの望むものがある。というのが直訳である。本屋で仏英・英仏辞典を買った。ランゲンシャイドではないが、同じようなポケット版である。

食料品屋で冷えたミネラルウォーターが飲みたくなり、“エスキリヤ・ユヌ・エビアン・ピアン・フロワ？”冷えたエビアンはありますか？と聞いたら、生憎と冷えてないのしかないと帰ってきた。ちゃんとフランス語が通じる。うれしくなる。“オ・ルボアー”さようならと別れる。シャンゼリゼは高いので、パレ・ロワイヤルで夕飯を食べて宿に戻る。

そういえば、雨に当たったのは、コペンハーゲン以来のことだった。スペインでは、毎日が灼熱の太陽だったのだ。さすがに長旅で、疲れてきてもいたのでパリの雨は、気持ちを落ち着かせてくれるものだった。ショパンの雨だれのような優しい感じ。

サンマルタンの宿は今朝までだったので、北大の先生とその家族にお別れをいい北駅に行き、宿をとる。財布を出していたらアメリカ人のおばさんに不用心だよと注意された。東駅よりも近代的で旅愁が漂っている。東駅は、昔から東部戦線へ送られる兵士が乗り込む駅だったころから、どことなく暗さを感じさせる駅だったとのことだが、北駅は、ベルギーやオランダ方面の出発駅で、現在は、ユーロスターの発車駅にもなるくらいで明るい感じがした。ここのインフォメーションでパリをたつ8月11日までの宿をとる。（下：リュクサンブール宮殿）



セーヌ左岸、メトロのモンジュ駅からムフタール街を下った Rue Lhomond 53 番地、ローモンド街 53 番地のレジデンス・クーベルタンというところ。よかった。個室。廊下の電気は時間

がたつと消えるのは皆同じ。これは7-8月のみ空いている物で、ソルボンヌあたりの学生の寮をバカンスの間だけ開放しているのだろう。荷物を置いた後、オランジェリー、オルセー美術館に行く。オランジェリーのルノワールのコレクションが良かった。チュイルリー公園にたたずむオランジェリー美術館、これは印象派美術館でモネの睡蓮が有名。またルノワールの *Fillette au Piano* (ピアノの少女) などもあった。しかし、私が最も気に入ったのは *Deux Filles* (二人の少女) で、絵はがきも売っていたが、日本にもあるだろうと思って買わなかったところが、日本に来ては、ついぞお目にかかることが無く、非常に後悔した。あと驚いたことだが、オランジェリーもオルセー美術館も世界的に有名な美術品が、手の届く位置にガードなしで展示してある。

オルセー美術館はゴッホの絵や、セザンヌ、ゴーギャン、ルノワール、ルソーなど印象派の殿堂。やはりルノワールの” *Mourning in the Forest* ” は良かった。かつてはオルセー駅だった。随所にその雰囲気漂わす。テラスからはモンマルトルの丘サクレクール寺院が見える。

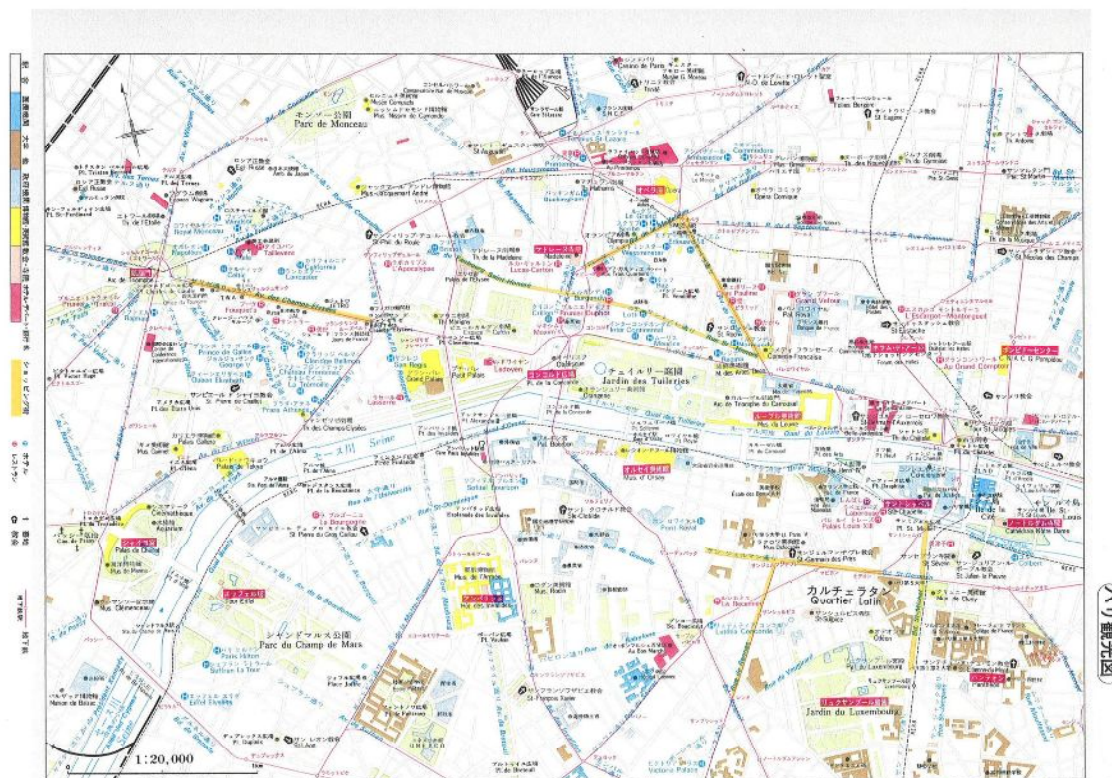
宿まで歩く。サンジェルマン・デ・プレ教会、サン・ミッシェル大通り、サンジェルマン大通り。ソルボンヌ大学。サン・ミッシェル大通りからサン・ジャック通りに入るとソルボンヌ大学の法学部がある。いわゆるカルチェ・ラタンである。今何時“エスク・ブザベラー?”と聞いてくるパリジェンヌ。“ボンジュール・ムッシュ”と挨拶してくるフランスのかわいい女の子達。警察に追いかける車。カルダンデザインの制服をきた警官。

すべてパリ、いかにもパリである。ただ街は以外に汚い。掃除をする人が、職をなくさないように、わざと掃除をしないと。 (下：私のお気に入り、リュクサンブール公園)



このあたりは、カルチェ・ラタンの近傍で下町の雰囲気が漂っており、ここからリュクサンブール公園、サン・ミッシェル、サン・ジェルマンを超えて、シテ島に至るあたりが、私の最も気

に入りの場所になった。リュクサンブール公園は特に大好きで、帰国までしょっちゅうここに来て休んだものだ。リュクサンブール宮はフランス上院。コンコルド橋を渡ったところにあるブルボン宮はフランス下院である。



毎朝、モンジュ通りのカフェでカフェオレ。主人は覚えてくれて、頼まなくても持ってきてくれるようになった。ベルサイユに行く。RER（高速地下鉄）で行った。この駅でも、かわいい女の子達が”ボンジュール、ムッシュ”と挨拶してくれる。

イギリス人の一行と一緒に英語ガイド付きのツアーに参加した。かわいい女の子がいた。太陽王と言われたルイ14世が情熱を傾けて作らせた大宮殿。しかし浪費がたたって、財政困難となり庶民の生活も苦しくなって、フランス革命に進んでいく。マリー・アントワネットが好んだというプチ・トリアノンには行かなかった。しかし、このはるか日本から離れたベルサイユで日本の修学旅行の一行を見たのにはびっくりした。

ベルサイユから戻ると、アルマ橋のたもとからバトームーシュにのり、セヌ河下りだ。20Frで所用1時間15分。自由の女神があった。エッフェル塔。革命200年記念の電飾がしてあった。今年1789年の丁度200年後なのだ。7月14日のパリ祭は、さぞかし盛大であつたらう。

アルマ橋から、セヌ河を登り、シテ島、サン・ルイ島と過ぎ、折り返し今度は河を下って、自由の女神のところで回って帰ってくる。

帰りはメトロ6号線で帰る。6号線は、地下鉄と言っても高架が多く、エッフェル塔をはじめ、パリ市街の景観を楽しむことができる。テレビのコマーシャルにも流れたことがある光景だ。



翌日、また例のカフェで朝食。今日はゆっくり橋散策をしようと決めた。まずシャンゼリゼのエアロフロートでリコンファームしておく。

まずモンマルトルの丘に行く、歩いてみる。画家達。ムーランルージュ。テルトル広場の画家達、観光客、赤いパラソルのカフェ。ロートレックの世界でもある。サクレクール寺院に向かう。よく写真で見るきれいな階段があった。ここから見るパリの情景はすばらしい。市内バスにも乗ってみる。さて今日は、セーヌ河の橋を巡ろう。アレクサンドル 3 世橋、芸術橋、ポン・ヌフなど。1900 年のパリ万博を記念して、ロシア皇帝が寄贈したアレクサンドル 3 世橋はパリで最も美しいと言われる。1604 年竣工の、400 年の時を刻む石造りのポン・ヌフ（新橋）、左岸とルーブル美術館を結ぶ、ポン・デザール（芸術橋）といかにもパリの光景を楽しんだ。ゆっくり橋めぐりを楽しんだあとは、ムフタール街の、L Enfant du Piree というレストランでエスカルゴを食べる。先に食べ終わった人が、ボンナペティと言ってくれる。エスカルゴはおいしかったが、これが原因かどうかはわからないが下痢をしてしまう。



(モンマルトルの丘へ向かう階段)

8月11日。パリの観光の最終日。朝、いつものカフェへ。いつものようにカフェオレを持ってきてくれる。私も感傷にひたり。チップとともに、毎日ありがとう。明日、日本に帰ります。パリは良かった。とフランス語でしたためてカップのそばに置いた。

本日は日曜。日曜はただということもありルーブルにもう一回行った。そして、その後は、がらりと気分を変えてポンピドーセンターへ。ポンピドゥセンターの4.5階はパリ国立近代美術館がある。不思議な建物であるがあまり印象深くない。前の広場では大道芸人がパフォーマンスをしている。



(セーヌ川とアレクサンドル三世橋、遠くにはエッフェル塔を望む)

パレ・ロワイヤルでおみやげを買う。更にシャンゼリゼから実家に電話してみる。 本当につながらるのにはびっくりした。

夕方からは雨。パリの床屋で最新のカットを頼むのは断念した。これは、スペインを旅行中に思いついたことで、パリの最新モードのヘアスタイルで日本に帰りたと思ったのだ。大体 6000 円程度だったと思う。クーペという。ただ、調髪してもらうときになんだか話を通じない、つまり世間話が通じないのが非常に気まずい感じがしたのでやめた。

スーパーで、食料、ワイン、チーズ、そしてシャンプーを買う。今までは、備え付けの石鹸で頭を洗っていたので、久しぶりのシャンプーで頭が洗える。スーパーで一般市民の生活にふれるのは、今回の旅行中でも楽しみなことであった。また、気がついたことだが、パリのスーパーでは、みんな買い物籠をもってきてそれに買ったものをいれて帰る。かごを持ってきてない人には、紙袋に入れてくれるのだが、これこそ資源の無駄遣いにならなくてすばらしい慣習だと思った。宿にもどり、明日の、シャルル・ド・ゴール行きのバスの乗り場を確認する。いよいよ今日はヨーロッパ最後の晩だ。町で食べるより、この静かな宿で、パリの市民になった気分がゆっくり過ごしたかった。

8月12日、エールフランスのバスでエトワール広場から40分。シャルル・ド・ゴール空港に着く。アエロフロート。モスクワで乗り換えである。帰りは、モスクワまでは非常にすいていた。日本に行くんだらう小さなフランス人の娘さんが、“こんにちは”と言ってくる。ほのぼのする。“ボンジュール、マダモアゼル”と返してあげる。

シャルル・ド・ゴールを飛び立った飛行機は、まずモスクワに向かう。天気が良く、大都市モスクワが見えた。さすがに大きな町である。本当は、くるときにモスクワ一泊の予定だったが、ホテルが取れなくて滞在できなかったのである。空港の免税店でナポレオンを買う。モスクワからはレニングラードに行っていたという人と隣り合わせ。エルミタージュ美術館はよかった。東回りの飛行機なので、夜がほとんど無い。暗くなったかと思うとすぐに夜が明ける。ほとんど寝てない。時差ボケだ。眠い。やがて午前11時頃、眼下に見慣れた景色が見え出すと、そこはもう関東平野。予定通り成田に着く。なんと蒸し暑いことか。42日間に及ぶ、私にとっての大旅行もさまざまな思い出を作って、ここ成田でフィナーレを迎えたのであった。

(完)

いまから12年前、私がヨーロッパを旅行したときは、まさに20世紀の中でも最もドラマチックな時期だったと思う。これは、記録にぜひ残しておきたいと思いつつもなかなかできずじまいで12年間も過ぎてしまった。昔のことを思い出しながら、また当時の記録をひっくり返しながらか、とにかく私がこの旅行で得てきたものを私の子供たちには伝えなくてはとの思いで、ようやくにして書き上げた。

私は、この旅行を通じて多くの人々、それは日本人もいれば外国人もいるが、に触れ合うことができた。世界観も大きく変わった。本当にこの旅行をして良かった。私の、二人の息子たちや娘が大きくなったときに、この旅行記を読んで少しでも世界に関心をもって、大きく羽ばたいてくれることを祈りたい。

表紙を含め、今市市在住の藤木様には、イラストを描いていただいた。

ちなみに当時の通貨の、換金レートは以下のものであった。

1DM 75yen

1DKr 25yen

1SF 100yen

1Peseta 1yen

1Fr 25yen

総費用 60 万円。出発前の準備で 5 万円。航空料金 20 万円。おみやげ 5 万円とすると 40 日間で 30 万円である。

プロローグ (西ドイツ-オーストリア編)

東欧編 (ハンガリー-チェコスロバキア-東ドイツ)

旅慣れた頃 (デンマーク-西ドイツ-スイス)

情熱のスペイン

エピローグ (魅惑のパリ)

ヨーロッパ行政図



ボンス図法

1 : 17,000,000



完